ISSN 2185-5986

# 國學院大學研究開発推進機構
# 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics
Kokugakuin University

第３号

平成 22 年（2010）9 月発行

神宮豊受大神宮（伊勢神宮外宮）　撮影　平藤喜久子

神宮豊受大神宮別宮風宮（伊勢神宮風宮）　撮影　平藤喜久子

厳島神社　　撮影　平藤喜久子

国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」　　撮影　ノルマン・ヘイヴンズ

# 國學院大學研究開発推進機構
# 日本文化研究所年報

## 第３号

## 目次

**【プロジェクト活動紹介】**
「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」　井上　順孝……　1
「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」
松本　久史……　9
**【2009 年度のトピック】**
国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」　……　13
ミニ・シンポジウム「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」
……　17
宗教文化の授業を考える研究会　……　21
第３回国際比較神話学会議　……　25
**【展望】**
「宗教文化士」制度の発足へ向けて　井上　順孝……　29
**【研究論文】**
グローバル時代と企業にとっての宗教文化　井上　順孝……　37
圓佛教教徒の意識調査―アンケート調査の分析を中心に―　李　和珍……　51
**【スタッフ紹介】**……　65
**【出版物紹介】**……　75

カバー写真　ノルマン・ヘイヴンズ

# 「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者　井上順孝

## 1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」は、2010年度から3年計画で行うことになっており、本年度がプロジェクト初年度となる。これは2007年度から2009年度にかけて行われた「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトを発展的に引き継ぐものである。

まず旧プロジェクトにおいて2009年に正式に運用が開始された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、本プロジェクトでも研究開発推進機構内の諸機関と有機的に連携しながら、システム面における整備・運営を行う。

内容面について、日本文化研究所のものに加えて、研究開発推進機構内の諸機関や学内の学部・大学院における研究成果など、本学の多様な学術資産をデジタル化して発信することによって更なる充実を図る。またそれらを教育など研究以外の方向へと活用していくことも念頭に置く。

加えて本プロジェクト独自のコンテンツを作成し、それを国際的に発信していくことも重要な目的となる。具体的にはEncyclopedia of Shinto（以下EOS）の更なる拡充、日本宗教と神道に関係する論文を他言語に翻訳して紹介し、日本と海外の研究者の知識の共有を図る双方向翻訳、またこれまで収集された教派神道関係の資料をデジタル化して公開することなどが計画されている。なお、これらの課題は旧プロジェクトから引き継ぐものであり、2002年度から2006年度にかけて行われた21世紀COEプログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』の後継事業としての性格を持つ。

関連分野への展開に関連して、既に旧プロジェクトにおいて科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（同科研費は2010年度が最終年度となる）と密に連携を行いながら、宗教文化士制度の実現に向けて準備を進めてきており、本プロジェクトもこの事業を推進していく。

これに関して、第一回目の宗教文化士資格試験を2011年度に行うことが予定されており、國學院大學もそこにパイロット校として参加することが決定している。また同制度の運営母体となる「宗教文化教育推進センター」の発足に先立ち、その準備室を2010年度中に日本文化研究所内に設置することが承認されている。

このように、本プロジェクトは旧プロジェクトの成果を受け、それを更に多方面に渡って展開させていくものである。以下ではまず旧プロジェクトである「デジタル・ミュージアムの構築と展開」の2009年度中の成果を簡単に紹介し、その上で2010年度の計画について概要を記すこととする。なお、2010年度のプロジェクトメンバーは以下の通りである。

責任者　井上順孝
分担者
平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高（専任教員）、黒﨑浩行、ノルマン・ヘイヴンズ、

斉藤こずゑ（兼担教員）、市川収、カール・フレーレ（客員研究員）、市田雅崇、李和珍（ＰＤ研究員）、今井信治、マシュー・チョジック（研究補助員）、ケイト・ナカイ（客員教授）、江島尚俊、エリック・シッケタンツ、ヤニス・ガイタニディス、キロス・イグナシオ、小堀馨子、ジャン＝ミシェル・ビュテル、高橋典史、武井順介、松本喜以子、ロハニ，ビナヤク（共同研究員）

## 2. 2009 年度の成果

### (1) 機構全体に関わる成果

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

まず、2007 年度より計画を推進してきた國學院大學デジタル・ミュージアムが、2009 年 5 月 15 日に正式に稼働を開始した。正式稼働にあたってシステムのレスポンスなど幾つかの問題が生じたが、これらは実際に稼働させてみなければわからなかった問題であり、適切に対応されて解消している。

公開時のデータベースは次の通りである。

「宮地直一博士写真資料」
「皇學館大学神道研究所所蔵原田敏明毎文社文庫写真資料」
「神道・神社史料 DB（古代神社 DB、現代神社 DB）」
「国学関連人物 DB」
「図書館デジタルライブラリー」
「大場磐雄博士写真資料」
「大場磐雄博士資料」
「柴田常恵写真資料」
「杉山林継博士収蔵資料」
「考古学資料館所蔵縄文土器」
「考古学資料館発掘調査報告書」
「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」
「Encyclopedia of Shinto」
「Basic Terms of Shinto」

2009 年度において、新システムの運営についてはこれまでと同様に各データベースの実務担当者を中心にワーキンググループを編成し、適宜協議を行った。内容面では各データベースが個別に充実を図っているが、これに加えて全体に関わる問題として、データベース追加機能を実際に使用した新規データベースの追加と、地図連携機能の実装が行われた。

新規データベースの追加に関して、デジタル・ミュージアムのシステム設計の段階で、データベースの追加を想定した支援システムを組み込んでおり、2009 年前半においてデータの調整を行って実際に追加を試み、9 月 1 日に「祭祀遺物出土遺跡 DB」、「万葉集神事語辞典」、「ホルトム文庫目録」の 3 データベースを正式に稼働させた。このうち「万葉神事語辞典」は辰巳正明教授が旧日本文化研究所時代に兼担プロジェクトの成果として作成した辞典に画像データを追加して新システム上で公開するものである。「ホルトム文庫目録」は平藤喜久子准教授が科研費による成果の一環として作成した目録情報に書き込み箇所の写真を追加してデータベース化したものである。なお、研究開発推進機構の成果だけでなく学内の学部・大学院における研究成果を新システムに組み込む手続きを協議して定め、これを全学教授会において報告した。

地図連携機能に関しては、以前から 2009 年度に実装するという方向で検討されていたが、デジタル・ミュージアムの正式公開後の安定稼働を確認した上で、6 月頃からあらためて検討を始めた。これは、数値データとして保持されている緯度・経度情報をグーグル・マップの提供する地図上に表示する機能であり、これをどのような形で実装するかについて各データベース担当者から聞き取りを行って要望をまとめ、それらの要望と技術的な問題を富士通の担当者と摺り合わせた。その後数回の打ち合わせを経て、まず 2010 年 2 月 10 日に管理システムに同機能を組み込み、その後 3 月 18 日に公開システムに同機能を実装して、利用者において地図からの検

索や項目からの地図表示ができるようになった。現在「神道・神社史料 DB」と「祭祀遺物出土遺跡 DB」に地図連携機能が組み込まれており、他の DB がこの機能をどのように活用していくかは 2010 年度以降の検討課題となる。

なお、デジタル･ミュージアムに関連して、図書館の横断検索システム K-search が正式に稼働したのを受けて、デジタル・ミュージアムも同システムによる横断検索の対象となっている。

◇第 3 回国際比較神話学会議

国際比較神話学会（International Association for Comparative Mythology）主催、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」と國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の共催による第 3 回国際比較神話学会議が 2009 年 5 月 23 日から 24 日にかけて行われた。

23 日の午前には松村一男（和光大学）による開会挨拶、井上順孝による歓迎の挨拶および科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の紹介の後、吉田敦彦（学習院大学名誉教授）、マイケル・ヴィツェル（国際比較神話学会会長、ハーバード大学教授）、千家和比古（出雲大社権宮司）の 3 氏による基調講演が行われた。なお、ヴィツェル氏と千家氏による基調講演を下敷きにした論文が年報第 2 号に収録されている。

また引き続き 23 日午後と 24 日に計 14 名の発表があり、神話学研究の最先端の動向について学び、活発な議論が行われた。

◇国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の主催によって、2009 年 9 月 20 日に国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が行われた。

それぞれ 5 名ずつの発題者とレスポンデントは次の通りである。

第一発題者：近藤光博（日本女子大学）、レスポンデント：冨澤かな（東京大学）。

第二発題者：中町信孝（甲南大学）、レスポンデント：臼杵陽（日本女子大学）。

第三発題者：ジョリオン・トーマス（米・プリンストン大学）、レスポンデント：櫻井義秀（北海道大学）。

第四発題者：ジャン－ミシェル･ビュテル（仏･国立東洋言語文化大学）、レスポンデント：西村明（鹿児島大学）。

第五発題者：グレゴリー・ワトキンス（米・スタンフォード大学）、レスポンデント：山中弘（筑波大学）。

司会は井上順孝が行った。

5 つのセッションにおける発題とコメントを受けた後で総合討議を行い、議論の中で幾つか問題点も指摘されたものの、映画を宗教文化教育に用いていくことの可能性が積極的に論じられた。全体を通して、参加者の共通理解が深められ、映画と宗教という問題について今後とも議論されるべきであることがあらためて確認された。

なお、本フォーラムの内容をまとめた報告書が刊行されている（本号出版物紹介参照）。

◇シンポジウム「宗教文化教育に求められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて」

科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」が主催し、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所が共催するシンポジウム「宗教文化教育に求められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて」が 2010 年 1 月 24 日に行われた。

発題者 5 名とコメンテーターは次の通りで

ある。木村敏明（東北大学准教授）、澄田新（関西学院高等部教諭）、多田哲（日本ユニシス株式会社 CSR 推進部長）、坪田知広（観光庁観光地域振興課地域競争力強化支援室長）、長井恵美（東京大学文学部学生）。コメンテーター：田中健二（アジア太平洋フォーラム理事長）。司会は井上順孝が行った。

本シンポジウムは、宗教文化士制度をスタートさせるにあたってこの制度がどのようなことを目指し、どのように実施していくかについて、個別具体的な議論を行なうために開かれた。参加者の制度に対する理解が深められただけではなく、教員や学生の立場から、あるいは企業や行政に関わる立場からの発題を受け、積極的な議論が展開された。

(2) プロジェクト独自の成果

◇ EOS の拡充

デジタル・ミュージアムの正式稼働を受けて、EOS の新システム上への移行が進められている。かねてより項目本文の英文見直しが行われていたが、2009 年 12 月の段階でそれまでに改訂がなされた項目をとりまとめ、2009 年度末に新システムへの登録作業を行った。見直し作業が進められていたのは主に第 1・3・4・7・9 部であり、これらの新システムへの反映作業は完了している。

付録部分の英訳も開始され、まず年表の英訳が着手された。

関連コンテンツの拡充としては、前年度に引き続き、初学者が画像を通じて神道の基本的な知識を学ぶことを目的とした Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide の内容の充足が図られた。

さらに、本文の一部は韓国語に翻訳することとなっている。「第 4 部神社」の翻訳が一応終了し、2010 年度からの公開を目指している。

◇双方向翻訳

2009 年度は次の 4 点の翻訳を行った。日本語から英語へ 2 点、英語から日本語へ 2 点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文

千家和比古「日本神話にみる基層心意―“出雲”の姿相・位相を踏まえて―」（英訳 The Underlying Mentality Seen in Japanese Mythology: Some Considerations in Light of Izumo's Particularities 訳者：松村一男）

長澤壮平「民俗儀礼と日常的身体経験―岩手県岳神楽を事例として―」（英訳 Bodily Experience in Everyday Life and Folkloric Ritual : The Case of Take-Kagura at Iwate Prefecture 訳者： MATTHEW, S. Mitchell）

・英語から日本語へ翻訳された論文

WITZEL, Michael "Central Asia and Japanese Mythology"（邦訳「中央アジア神話と日本神話」。訳者：松村一男）

ANTONI, Klaus "Izumo as the 'Other Japan': Construction vs. Reality"（邦訳「もう一つの日本」としての出雲―虚像と現実―」。訳者：石黒弓美子）

なお、千家氏と WITZEL 氏の論文は前述の第 3 回国際比較神話学会議における発表を下敷きにしたものである。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に収集した神理教、神道修成派、黒住教の教団資料について、かねてからデジタル化の作業が進められていたが、デジタル・ミュージアムの正式稼働を受けて、新システム上での公開に向けてデータの整備を行っている。

また神道系新宗教の一つである祖神道の教団資料について、教団から許可を受けて 2008 年度からデジタル化とデータベース化を進めており、2009 年度もこの作業を継続して行った。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

宗教文化士制度と関連して、主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集している。2009年度はウェブ上の関連情報を収集し、また井上順孝編著『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂、2009年5月（新刊紹介参照）と国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」と関連して、宗教文化に関する映画をリストアップした。

◇科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者：大正大学教授星野英紀）との連携

科学研究費補助金によるこの研究は、大正大学星野英紀教授を研究代表者として2008年度から3年計画(最終年度：2010年度）で行われており、研究分担者として「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトメンバーの井上順孝、黒﨑浩行、平藤喜久子の3名、また連携研究者として同じく星野靖二と学術資料館の加瀬直弥の2名が加わっている。この研究の目的は大学における宗教文化教育の実質化を図ることであり、具体的には宗教文化士制度の実現を目指しているが、本プロジェクトの成果も宗教文化教育に密接に関わるものであるため、連携して事業にあたる。これは2010年度からの新プロジェクトにおいても継続していく。

2009年度の関連する活動としては、2009年5月にハーバード大学が主催した国際比較神話学会議を日本文化研究所と同科研費が共催し、同9月の国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」は日本文化研究所と同科研費が主催した。また2010年1月に行われた同科研費主催のシンポジウム「宗教文化教育に求められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて」を日本文化研究所が共催した。いずれも参加者から高い評価を受けている。

3. 2010年度の研究計画など

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

國學院大學デジタル・ミュージアムが2009年に正式稼働したことを受けて、2010年度は研究開発推進機構内の諸機関と密接に連携しながら新システムの整備･運営を行い、かつ研究に加えて教育など広く社会に還元することを念頭に置きながらデジタル・ミュージアムの内容の一層の充実を図っていくことになる。このために各データベースの実務担当者を中心にワーキンググループを組織し、情報を共有して新システムの円滑な運営を図る。

内容の充実に関しては、各データベースが個別に作業を進めるのに加えて、新規データベースの追加についても検討する。学内の学部・大学院における研究成果を新システム上で公開する手続きについては昨年度中にこれを定めて全学教授会において報告してあるため、申し出を受けて対応していくことになる。

また、2009年度に実装された地図連携機能をどのように活用していくかについて、ワーキンググループにおいて協議していく。

◇ EOSの拡充

まずEOSの新システムへの移行を進める。EOSは現在、当初公開されたバージョンと國學院大學デジタル・ミュージアム上のバージョンが並存しているが新バージョンに一本化すべく、新バージョンの機能と使い勝手を向上させていく。

これと関連して、かねてから表記の統一を含めて項目の本文をより適切な記述に改訂する作業が行われていたが、これを継続すると共に、改訂された本文を新システム上のEOSに反映させる作業を進める。

内容の拡充としては、昨年度に引き続き年表の翻訳を推進し、Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guideの更なる充実を図

る。またEOSの韓国語訳に関しては、2009年度後半から開始された「第8部流派・教団と人物」の翻訳が引き続き進められており、既に翻訳が終了している「第4部神社」については2010年度中の公開を目指す。

◇双方向翻訳

日本宗教と神道に関係する論文の相互翻訳についても引き続きこれを行い、2010年度も4本ないし5本の論文の翻訳を予定している。中心となるのは日本語論文の英語訳と英語論文の日本語訳であるが、韓国語など他言語との間の翻訳も念頭に置いている。また既に15本を超える蓄積があるため、これをよりアクセスしやすい形で発信する方法についても検討していく。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に収集した神理教、神道修成派、黒住教の教団資料について、引き続き新システム上での公開に向けてデータの整備を行っている。また、これも引き続き神道系新宗教の一つである祖神道の教団資料のデジタル化を行っているが、ある程度まとまった段階で、内容の分析に着手する。

◇学生に対する宗教意識調査（第10回）の実施

学生の宗教意識についてのアンケート調査を「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で行い、本年度中に報告書としてまとめる。この調査は1995年以来、日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会のプロジェクトが合同で行ってきており、今回が第10回となる。質問項目のうち半分程度は初回から通して同じものであり、この15年の変化を調べることができる貴重な資料となっている。

◇宗教文化教育の充実のための教材作成

旧プロジェクトは科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者：大正大学教授星野英紀）と密接に連携を図っていたが、2010年度は同科研費の最終年度となるため、これを受けて本プロジェクトが研究成果のとりまとめのシンポジウムの開催、報告書の作成などを行う。

また同科研が目指していた宗教文化士制度について、第一回資格試験が2011年に行われる予定となっているが、その運営母体となる「宗教文化教育推進センター」の発足に先立ってその準備室を日本文化研究所内に設置し（2010年4月より2011年3月まで）、本プロジェクトがこれを支援する。

この宗教文化士制度と関連して、宗教文化教育のための教材作成を念頭に置いて旧プロジェクトでも現代宗教に関する資料やデータの収集とそのデジタル化が進められていたが、本プロジェクトの2010年度の計画としては、日本文化、宗教に関する動画教材の作成とその公開に向けて作業を進める。

◇国際研究フォーラム

本プロジェクトは国際的な研究交流の推進を重視している。これは21世紀COEプログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』から旧プロジェクトを経て一貫して引き継がれている基本的姿勢であり、毎年最低1回は国際研究フォーラムを開催して研究者の国際的ネットワークをより発展させることを目指している。

2010年度は、宗教文化士制度の開始を念頭に置きながら、「イスラームと向かい合う日本社会」をテーマとして10月3日に開催予定である。予定されている発題者5名とコメンテーターは次の通り。三木英（大阪国際大学）、Isam Hamza（エジプト、カイロ大学）、Salih Yucel（オーストラリア、モナッシュ

大学)、Gritt Klinkhammer（ドイツ、ブレーメン大学)、中西俊裕（日本経済新聞社)、コメンテーター：師岡カリーマ・エルサムニー(慶應大学、獨協大学、アナウンサー)。司会は井上順孝が務める。

また前日の10月2日に、講師に小杉泰・京都大学大学院教授を招いて「現代イスラームと日本社会」というテーマで公開学術講演が行われる。主催は研究開発推進機構であるが、本国際研究フォーラムと連動するものである。

# 「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

プロジェクト責任者　松本久史

## 事業概要

本事業は、国学者の霊魂観・死生観や死に関わる諸儀礼（葬儀、霊祭など）について、実証的な方法で明らかにする。従来の研究においては死生観・霊魂観は専ら思想史分野のテキスト分析が中心であり、一方葬儀、霊祭などの実践的分野は史資料からの実証的研究が主であり、両者、つまり思想と実践の関係は必ずしも明らかではなかった。本事業の特徴的な点は、テキストの内容分析にとどまることなく、テキストの成立、流通などを含めた、当該テキストの社会史的文脈の把握、地域の神職や国学者らによる葬儀・霊祭など社会的実践の実証的理解と、そこでのテキストの用い方や関係する情報の共有のあり方などの分析を通して、近世国学の霊や死後をめぐる思想と実践をトータルに理解することを目的としていることである。具体的には下記の各項目にしたがって事業を進めている。

Ⅰ国学の霊魂観関係の主要テキストの分析
（1）国学者の霊魂論・幽冥論
（2）神葬祭関係書の収集と調査
Ⅱ神葬祭・霊祭・霊社建立を中心とした社会的運動の分析
（1）鈴門における霊魂観と実践―霊祭・霊社・神葬祭―
（2）平田国学における幽冥観の拡散・多様化と実践
Ⅲ研究成果の公開

平成21年度の事業実施計画
Ⅰ（1）国学者の霊魂論・幽冥論関係テキストの調査・収集、『霊能真柱』精読会、校注作業
（2）神葬祭関係書の調査・収集・分析
Ⅱ（1）鈴門の霊祭運動と神葬祭の調査・分析
（2）平田家のイエの祭祀の調査、平田国学影響下の幽冥思想に関する調査・研究
Ⅲ『神葬祭資料集成』増補文献リストの作成、「近世から近代初頭における国学の霊魂観」ミニ・シンポジウムの主催、高玉家文書（翻刻）原稿作成、出版準備

本年度は3カ年計画の2年目として、昨年度の成果を継承しつつ、3年目での成果を視野に収めた活動を行った。

## Ⅰ国学の霊魂観関係の主要テキストの分析

国学者の霊魂論や幽冥論に関する著作を調査･収集しその研究成果を発表するとともに、本居文庫本『霊能真柱』を精読する研究会（「霊能真柱を読む会」）を隔週で開催した［Ⅰ（1）］。また『霊能真柱』のHTML化作業は8割程度まで進展し、精読についても上巻をほぼ読了した。なお、研究会には機構内の教員や大学院生なども参加している。22年度は引き続き国学者の霊魂観・幽冥論に関する研究成果を発表しつつ、『霊能真柱』ネット公開のためにHTML化作業を早期に完了し、体裁

を整えていく予定である。

研究成果として、三ツ松誠は『霊能真柱』を分析して「学者と講釈師のあいだ―平田篤胤『霊能真柱』における安心論の射程―」(『死生学研究』13、2010年3月)、安政の大獄の首謀者としては著名であるが、鈴門系の国学者でもあることはあまり知られていない長野義言(主膳)の霊魂観・幽冥観に着目し、「長野義言の「霊魂考」」(『東京大学日本史学研究室紀要』別冊「近世政治史論叢」、2010年3月)を発表するなど、テキストと実践との関係について考察を深めた。小林威朗は津和野藩神葬祭運動の中心人物である国学者、岡熊臣の霊魂観のテキスト分析を前年度から継続して行い、平成21年12月に國學院大學で開催された神道宗教学会第63回学術大会において「『霊の梁』について」の題で口頭発表を行った。

神葬祭関係書の調査については[I(2)]、東丸神社所蔵東羽倉家文書を用いて、松本久史が「荷田派の霊魂観と実践―他界の認識を巡って―」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第4号、平成22年3月)を発表した。荷田春満を中心として、門人(荷田派)の霊魂観を分析したものであって、霊祭と神葬祭の実施に深く春満の思想が関わっているとともに、後世の篤胤の構築した霊魂観・他界観とは異なる荷田派の霊魂観を明らかにして、本居宣長以前の国学者の霊魂観研究を進展させた。

## II 神葬祭・霊祭・霊社建立を中心とした社会的運動の分析

(1)の鈴門の霊魂観について考察する手がかりを獲得するべく、遠州の本居派門人を中心に、資料の調査・収集を実施した。平成21年8月に、松本久史と三ツ松誠が、静岡県掛川市の大日本報徳社図書館、湖西市白須賀の湖西市立おんやど白須賀、新居町立関所資料館を調査地として、鈴門系の国学者である夏目甕麿、石川依平、高須元尚といった国学者に関係する資料を対象に行なった。甕満、依平は鈴門の重鎮であるとともに、近世国学者の霊魂観をめぐる論争である「『三大考』・『霊能真柱』論争」にも関連しており、また遠江国は春満以来、国学の道統を受け継いだ地域でもあって重要である。調査においては杉浦国頭や石川依平の著作や関係資料を閲覧し、さらに本居派国学者が篤胤に向けた批判をまとめた『天説弁々の弁』の写本を撮影した[I(1)にも関連]。また、白須賀では夏目甕麿の生地跡などをも踏査した。

(2)については、国学的霊魂観を考える上で重要である、平田家の活動に関する調査を行った。具体的には、平成22年2月に、松本久史、中野裕三、小林威朗、三ツ松誠、それに菅浩二(研究開発推進センター准教授)も加えて、篤胤直筆の稿本が所蔵されている秋田県公文書館を調査先に設定して、諸資料を採訪した。その結果、『印度蔵志』やいわゆる「大意もの」の自筆稿本約60点を撮影した。この調査で得られた資料は、特に『霊能真柱』の成立過程や背景を理解するために用いる予定である。また、三ツ松誠は幕末・維新期の気吹舎門人である三輪田元綱の安政期の活動を調査し、平田派の霊魂観と政治・社会実践との関係を分析し、「異国と異界―安政期の三輪田元綱―」(『神道宗教』216号、平成21年10月)を発表した。

## III 研究成果の公開

以上のような日常的な調査研究活動の成果の公開についても、21年度は積極的に行い、平成22年1月21日に國學院大學においてミニ・シンポジウム「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」を開催した。発表者に早稲田大学大学史資料センターの中川和明氏を招き、近世中期から後期にかけて広い視野での霊魂観と実践の議論がなされた(詳細は遠藤潤による同シンポジウ

ムの報告を参照)。また、遠藤潤は國學院大學オープン・リサーチ・センター推進事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」において、平成21年10月に北海道滝川市の國學院大學北海道短期大学部で開催された、一般市民も対象にした公開講座「國學院の古代研究」では、「近世国学の古代研究―平田篤胤を焦点として―」の題で発表し、平成22年1月には奈良県天理市の天理大学おやさと研究所宗教研究会「教祖論・開祖論の構築・脱構築」において、「平田篤胤と気吹舎―教祖論・開祖論からみた「大人」と門人組織―」を発表するなどして、篤胤を中心に本事業の成果の一部を公開している。また、上記「霊能真柱を読む会」と隔週で、平田銕胤書簡を多数含む高玉家文書の読解を進め、既翻刻部分についての校正・確認作業を行った。さらに、中野裕三は近代の招魂祭の祭詞の分析を進め、その成果を「招魂祭詞に見られる霊魂観―近世国学者の霊魂観との比較―」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第4号、平成22年3月)として発表した。

平成22年度の事業展開

本事業の計画は事業スタッフのみならず、機構内の教員や、学内外の研究者とも連携しつつ進められている。平成22年度をもって本事業は終了するが、冒頭に掲げた期間全体の研究計画を予定に沿って着実に実行していくことによって、本学の国学研究の継承・進展に寄与していきたいと考えている。すなわち、将来的には本事業の成果を中核としつつ、機構内に加えて学内で遂行されている国学関係の研究諸事業との連携を、たとえば、共同の研究会を企画すること、デジタルミュージアムの活用などを通じて推進することを構想している。本事業は機構が発足したばかりということもあって、研究規模・予算ともに最小限で進めてきたが、今後は、大学全体の研究ネットワークを形成し、数多くの教員・研究者の参加を求めていき、機構および日本文化研究所が、設立以来有している国学研究の拠点としての機能を果たし続けていけるように努めていきたい。

# 国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

2009 年 9 月 20 日に、國學院大學ＡＭＣ棟１階常磐松ホールにて、国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究（Ａ）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の主催によって国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が行われた。

本フォーラムは、映画を宗教文化教育の教材の一つとしてとらえた場合に、そこにどのような問題点と可能性があるのかについて幅広く議論することを目指すものであり、それぞれ５名ずつの発題者とレスポンデントの発題とコメントを受けて最後に総合討議を行うという形で進行された。以下に発題の題名を発題順に記す。なお、司会は井上順孝が務めた。

◇　第一発題者　近藤光博（日本女子大学）「映画を教材にして比較宗教の理論的課題を明らかにする――ひとつの試みの報告」、レスポンデント　冨澤かな（東京大学）。

◇　第二発題者　中町信孝（甲南大学）「アラブ歴史映画に見るイスラームとナショナリズム」、レスポンデント　臼杵陽（日本女子大学）。

◇　第三発題者　ジョリオン・トーマス Jolyon Thomas（米・プリンストン大学）「西洋から見た日本映画の宗教性」、レスポンデント　櫻井義秀（北海道大学）。

◇　第四発題者　ジャン－ミシェル・ビュテル Jean-Michel Butel（仏・国立東洋言語文化大学）「アニメはどんな宗教を語ってくれるか―『平成狸合戦ぽんぽこ』に見る日常宗教」、レスポンデント　西村明（鹿児島大学）。

◇　第五発題者　グレゴリー・ワトキンス Gregory Watkins（米・スタンフォード大学）「宗教と映画を教える際の新しい傾向」、レスポンデント　山中弘（筑波大学）。

続いて各発題の内容について簡単に紹介する。

第一発題者　近藤光博（日本女子大学）「映画を教材にして比較宗教の理論的課題を明らかにする――ひとつの試みの報告」、レスポンデント　冨澤かな（東京大学）。

近藤は、まず宗教学という学問そのものが抱えている理論的課題、すなわち宗教と世俗の二分法において成立している「宗教」という言葉が、今日的状況にうまくあてはまっていないという問題をどのように乗り越えるかという問題意識について述べ、その展開において抽象的な問題に具体的なイメージを与えるために映画を用いているとして、実際にいくつかの映画を挙げてこれを説明した。

これを受けてレスポンデントの冨澤は、映画に含まれている虚と実をどのように切り分けるか、またドキュメンタリーの虚と実についても、どのように取り扱うことができるのかといった問題提起を行った。

第二発題者　中町信孝（甲南大学）「アラブ歴史映画に見るイスラームとナショナリズ

ム」、レスポンデント　臼杵陽（日本女子大学）。

中町はまず教材としての映画を三つのレベルから捉えることができるとし、第一に映画を歴史の再現として捉えるある意味単純なレベルがあり、第二にそこに作り手の脚色があることを指摘するレベルがあるとした。しかし、この第二のレベルに関して逆に教師の恣意的な読み込みを避けるためにも、第三のレベルとしてその映画が成立している社会・時代状況に目を向ける必要があると述べた。

具体的な例として幾つかのアラブ歴史映画を取り上げ、例えばハリウッド映画とエジプト映画では同じ出来事が異なる形で描かれていることについて説明し、またそこに監督と観客が共有している前提を見て取ることができることを指摘した。

これを受けてレスポンデントの臼杵は、中町が取り上げたユーセフ・シャヒーンという映画監督の宗教的背景について補足した上で、日本の学生があらかじめ持っているイスラームイメージを投影する形で映画を誤読してしまう可能性があることを、過去の授業の例に触れながら指摘した。

第三発題者　ジョリオン・トーマス Jolyon Thomas（米・プリンストン大学）「西洋から見た日本映画の宗教性」、レスポンデント　櫻井義秀（北海道大学）。

ジョリオンは、映画と宗教という問題が近年学問的に研究されるようになってきたことに触れながら、しかしその方法についてはまだ十分に検討されていないとし、受容理論やカルチュラル・スタディーズの手法を取り入れて観衆の受容の仕方に目を向けることの重要性を強調した。

また一口に映画と宗教といっても、単に背景、あるいは美的・表面的な記号としてのみ宗教的な事物を用いている映画もあれば、逆に宗教団体などによって明らかに教化的な目的をもってつくられた映画もあるとし、また結果として宗教的に受容されるような映画もあると述べた。そしてこの最後の種類の映画とその受容についての研究にはやはり観衆の側に目を向ける必要性があると指摘した。

これを受けてレスポンデントの櫻井は、観衆の受容に着目することの重要性を再確認した上で、なお作り手側の意図を含めた映画の脈絡や背景などもやはり押さえておく必要があることを、ドキュメンタリーを用いた授業の例に触れながら述べた。

第四発題者　ジャン－ミシェル・ビュテル Jean-Michel Butel（仏・国立東洋言語文化大学）「アニメはどんな宗教を語ってくれるか―『平成狸合戦ぽんぽこ』に見る日常宗教」、レスポンデント　西村明（鹿児島大学）。

ビュテルは、フランスで現代日本文化入門という授業を行う際に、高畑勲監督による『平成狸合戦ぽんぽこ』というアニメーション作品を用いていることについて述べた。

これは一つには日本のゲームや漫画、アニメーションに関心を持つフランスの若い学生たちに対してより受け入れられやすい形で日本文化への入り口を提供するという戦略であるが、他方で『ぽんぽこ』に多くの宗教的要素が見られることにもよる。もちろん『ぽんぽこ』は直接宗教を取り扱う映画ではないが、逆に非一貫的に提示されている宗教的要素が、かえって日本文化のなかに組み込まれている諸々の宗教的要素をうまく表しているのではないかと論じた。

また、映画の中のひとつのクライマックスに狸の変身による妖怪の大パレードがあり、これを見た学生たちはそこに強いエキゾティズムを感じるという。しかし、映画の中の登場人物たちは必ずしもその妖怪たちを宗教的には受け取っていないということが決定的に重要であるとビュテルは指摘し、日本人をエキゾティズムにおいて捉えることを再び相対

化することの必要性を述べ、またそうしたメッセージをも発している点において『ぽんぽこ』がすぐれた教材足り得るとした。

これを受けてレスポンデントの西村は、映画と宗教を考える際に、単に映画の中に宗教文化的な要素を見出すだけでなく、宗教でもって映画を見るという視点、あるいは方法が重要なのではないかと指摘した。また例えば『ぽんぽこ』を一つの焦点として日本とフランスの学生がお互いの捉え方について論じ合うことで、更に認識を深めることができるのではないかという見通しについて述べた。

第五報告者　グレゴリー・ワトキンス Gregory Watkins（米・スタンフォード大学）「宗教と映画を教える際の新しい傾向」、レスポンデント　山中弘（筑波大学）。

ワトキンスは、映画と宗教について実際にどのような授業を行っているのかについて、小集団による開けた議論を中心にしていることや、またそれを通じて学生達に議論のための共通の土台を作っていくことといった手法的なことについて触れ、また取り上げる教材について、古典的な宗教理論を含む課題図書と様々な傑作映画を組み合わせていることなどを詳しく説明した。

そして授業を通じて学生達がそもそも映画とは何か、宗教とは何かといった根本的な問題について思索を深めること、また映画という独自の性格を持つメディアにおいて、そこにはある種の宗教表現やあるいは宗教体験が立ち現れてくることについて考えるようになることについて述べた。

これを受けてレスポンデントの山中は、ワトキンスの提示した授業がある種の範型となり得るとし、そこで映画が単に宗教理解のための道具として用いられているのではないことが重要であると指摘した。

その後フロアとの活発な議論が交わされ、映画が宗教文化教育において大きな意味を持つということについて参加者の共通理解が深められ、これまで必ずしも十分に議論されてこなかった面がある映画と宗教という問題について今後より議論が展開させられていく可能性を感じさせるフォーラムとなった。

なお、本フォーラムの内容をまとめた報告書が刊行されている（本号出版物紹介参照）。

（星野靖二）

# ミニ・シンポジウム
# 「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」

日本文化研究所研究事業「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」では、下記の通りミニ・シンポジウムを開催した。

「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」
2010 年 1 月 21 日（木）14:00 ～ 17:20
國學院大學 学術メディアセンター 5 階 会議室 06

司会　星野光樹（研究開発推進機構）
趣旨説明　遠藤潤（研究開発推進機構）
小林威朗「神職・国学者岡熊臣の霊魂観形成過程に関する一考察」（研究開発推進機構、國學院大學大学院）
中川和明（早稲田大学大学史資料センター）「平田篤胤『勝五郎再生記聞』の波紋と死生観・霊魂観」
松本久史（研究開発推進機構）「近世中期国学者の霊魂観―思想と実践―　荷田派を例として」
コメント　三ツ松誠（研究開発推進機構、東京大学大学院）

## 小林威朗「神職・国学者岡熊臣の霊魂観形成過程に関する一考察」

小林は、これまで本居宣長と平田篤胤の融合と評価されることの多かった岡熊臣の霊魂観（死後観）について新たな視点から論じた。これまで、熊臣の霊魂観（死後観）は、霊魂を「本霊」と「奇魂・幸魂」などに分かれ、宣長にもとづいて本霊が夜見国へ行くとするとともに、篤胤に依拠して幸魂・奇魂は幽冥界に行くとして、死後の霊魂とその行方をともに二つに分けることによって宣長と篤胤の説をうまく調和させ、独自の説として形成したものであると理解されてきた。ただし、これは基本的に熊臣の霊魂観が完成をみた『千世乃住処』に依拠して論じられたものであり、霊魂観の形成過程は必ずしも注目されてこなかった。小林は、その途上にある『霊の梁』を対象として、熊臣が宣長と篤胤の説を統合した経緯を分析した。『霊の梁』では、伊邪那美が夜見に赴いたときに「現御身」のままだったのか崩御だったのかという点について曖昧な表現がされている。小林は、その理由について、神葬祭を志向する神職の思想としては、人の死を説明するためには、宣長のようにこれを崩御と認めることが重要だが、同時に全ての人の死後の魂を祀るためには、人の魂は神と同じく幽世に留まると捉えた篤胤の思想も必要としたのだと理解した。

## 中川和明「平田篤胤『勝五郎再生記聞』の波紋と死生観・霊魂観」

中川は、藤蔵が勝五郎に生まれ変わったという経緯を記した平田篤胤『勝五郎再生記聞』について、近年の研究状況、すなわち平田篤胤関係資料の整理・公開に伴なう勝五郎関係の新資料の発見、舞台となった地元（日野市・八王子市）における関係資料の探索の進展、地方国学関係史料の調査の展開などをふまえて、再検討を行なった。

この再生一件に関しては諸般の記録があるが、文政6年4月に池田冠山が勝五郎を訪問して著した『勝五郎再生前世話』が端緒である。同年4月に松浦静山はその伝聞情報を『甲子夜話』に記録し、6月末には篤胤が『勝五郎再生記聞』を清書した。冠山が彼の再生を正体不明の翁によるものとし、静山がそれに加えて地蔵の関与を記したのに対して、篤胤は産土神を中国の城隍神と同一視して、その働きによるものと考えた。篤胤の上京・書物献上の際には『勝五郎再生記聞』も御所に渡り、筆写のうえ返却された。当初門外不出とされた同書であるが、三河の門人羽田野敬雄は早くに注目し筆写しており、篤胤没後には写本の形で門人に頒布された。津軽では鶴屋有節や平尾魯仙が同書を読んだことが確認され、今村真種は気吹舎の許可なく同書を版行した。

明治初年には文教・行政機関では平田国学の書物が多く用いられたのに関わらず『勝五郎再生記聞』の所蔵は見られない。井上円了は『妖怪学講義』のなかで勝五郎の再生譚をあげながら通俗的な再生説を批判した。柳田国男は『先祖の話』でこの再生譚をとりあげるが、真偽は問わず、民間における子供観の特徴を見出している。勝五郎再生をめぐる議論の沸騰は、再生観や霊魂観を論じる際に単なる思弁ではなく、裏付けとなる〈事実〉が必要とされる、19世紀という歴史段階の一端を示していると考えられる。

### 松本久史「近世中期国学者の霊魂観―思想と実践―　荷田派を例として」

松本は、国学者の「霊魂観」とその実践についての従来の研究が、人物としては宣長以降、時期的には18世紀後半に対象を限っており、それ以前のものとして比較するのも儒家神道である垂加・吉川神道のみである点、神道・神社史と神道思想史の乖離に由来する霊魂観と社会的実践面とのリンク不足という二つの問題点を見た。これらを克服すべく18世紀前半を焦点として神職との関係の深い荷田派を対象として論じた。

荷田派の霊祭・神葬祭について見ると、荷田春満において霊祭・葬儀の根拠は、日本書紀神代巻解釈にもとづく「神祇道徳説」に由来しており、埋葬の起源を伊弉冉尊の紀伊国熊野村での埋葬に、儀礼の起源を天稚彦の葬儀にそれぞれ求める。ここには、葬儀は聖人の制作ではなく日本では神代から実施していたという儒教への対抗意識がうかがえる。霊祭の実施については、春満による霊号、祝詞・祭式作法、祭器などの伝授の事実がある。神葬祭については、『家礼』を参照してその用語も用いる一方、書紀神代巻も斟酌している。吉田家の神葬祭との関係については、荷田派が八を単位として忌日を考えている点は吉田家と共通しているが、祓詞や祓の儀式がほとんど見られない点は大きく異なる。

つぎに荷田派の霊魂観であるが、主要な構成要素に魂・気・水などがある。魂とは別に魄を認める場合もあるが一定していない。気は天津気と国津気に区分され、火にも喩えられる。水は基本的には肉体そのものと理解される「根元水」「元津水」などと表現される。他界には、①黄泉、②根国、③常世国、④海宮、⑤八十隈などがあるが、春満をはじめ荷田派は、②～⑤は死者の肉体および霊魂が赴くところではないとし、魂は日少宮（具体的には太陽）、形の御魂（＝魄）は黄泉の国へ赴くと考えられていた。

以上見てきたような荷田派のあり方は、過渡的な性格が強いものの、同時に前時代の批判・脱却を志向するものだったといえる。

### コメントと質疑応答

コメンテーターである三ツ松誠が各発題者に質問およびコメントを述べたのち、フロア

を交えた質疑応答を行なった。

三ツ松は、小林は神葬祭運動の挫折と熊臣テキスト内容を結びつけて論じたが、両者の具体的関係を示す史料にはどのようなものがあるのか。幽顕をめぐる篤胤と熊臣の解釈の相異について小林は天孫降臨の前後という時期に問題の焦点があると考えたが、むしろ別の点に両者の違いはあるのではないか。また、篤胤と熊臣の違いを強調するが、神葬祭に対する両者の態度はそれほど違うのだろうかと問うた。

これに対して小林は、思想が実践に反映する道筋は今回の報告では説明できなかったが、『霊の梁』編纂後に弟の三年祭や祖父の七年祭を行なっており、そのときの霊祭の祝詞を分析することで何か明らかになる可能性がある。また、『霊の梁』以後の著作を検討していくことによって、思想の形成と定着についてはより確かに理解できるはずである、と述べた。また、篤胤の門人である川崎重恭『霊の小柱』では熊臣『霊の梁』を評価しているので、それを分析していくことも重要だとし、篤胤説に忠実な重恭の史料を援用しながら篤胤と熊臣の違いについて説明した。

三ツ松は中川に対して、『勝五郎再生記聞』が近代の文教・行政機関に所蔵されていないことを近世から近代への再生観の変化の例証としてあげているが、そもそも近代にその種の機関に所蔵されたのは版本であり、写本である同書は内容いかん以前に収集対象にならなかったのではないか。また近代の再生観を考えるときに勝五郎を主対象に据えるよりはむしろ井上円了を主題的にとりあげるべきではないのか。また、柳田国男が篤胤の霊魂観を継承したといえるのかどうか疑問がある、とした。

中川は、平田内部での再生観の扱いは近世と近代はさほど変化していないが、外部での議論が変わるのではないかとした。また、版本／写本の問題はあるが、『勝五郎再生記聞』をどうしても用いたいというのであれば写本でも所蔵したと推測できるので、そこまでの欲求がなかったといえる。円了に注目したのは『勝五郎再生記聞』を２冊も所蔵していた点が気になったからで、円了も同書を意識していたと推測されるのであり、印度学仏教学の文脈からは出てこないのではないか。柳田は単純に平田国学を継承したとはいえず、むしろさまざまな批判をしているが、平田国学ぬきで柳田の学問ができなかったことも確かだ、と述べた。

また三ツ松は松本に対して、荷田派の死後世界観について論じたが、それが人間の生にどのように関わるのかについては触れなかった。例えば、篤胤であれば死後審判が考えられ、生前の行いの善悪は死後のあり方と深く結びついている。荷田派はどのように考えるのか、と問いかけた。

松本は、荷田春満の高弟である杉浦国頭『神代巻剖記講義鈔』などを示して、荷田派が神の世界の構造についてどのように理解していたかを説明した。また、地獄・極楽を教える仏教に対して、海神宮を例にして神道はこの地上で苦労することが大切だと説く例があったことを示し、この世のなかで道徳的な行いを行うことが重要だが、死後審判のようなことは想定していないというのが基本的なあり方であるとした。

会場からは田尻祐一郎（東海大学）が、死霊の行方ばかりでなく死霊が生者にとってどういう力を持つのかという点も重要な問題ではないかと指摘し、宣長にはそういう力をあえて論じなかったと考えられるが、そういう力についての論はいつ頃登場してきたのか、という疑問を提示した。小林は、宣長も死霊が夜見に赴きながらも現世の生者に影響力を及ぼすと考えていたのではないかとした。ただ、宣長は自分の死に直面するまでは葬儀をそれほど真剣に考えていなかったのに対して、篤胤や熊臣は宣長の葬儀の例から影響を

受けて、平常時から生者と死者の関係を考慮しつつ自説を構築したと思われるとも述べた。中川は、篤胤では『新鬼神論』以来、死霊が生者を見守るというのが基本的な考えで、さらに産土神などの特徴的な考えがあったことを指摘した。また死霊が生者に負の影響を及ぼす例もあると述べた。松本は、なぜ先祖を祀るのかという問題について、荷田が神代からの法があるからと考えていたことを指摘し、先祖祭祀の結果として家や子孫が繁栄すると説明するものの、生者と死者の論理的な関係について明示的な語りはあまりなかったと述べた。

（遠藤　潤）

# 宗教文化の授業を考える研究会

## 研究会の趣旨・目的

「宗教文化の授業研究会」の趣意書を次に引用する。

近年大学における授業の質の向上は、喫緊の課題として各大学で取り組みが進められている。しかしマルチメディア教材やインターネットの利用方法、メディアリテラシーの向上といった他の授業科目とも共通する課題のほかに、学問領域ごとに固有の課題もあるだろう。宗教文化の授業についていえば、宗教教団の実地踏査の方法や、調査方法、教室で「信仰」を扱うことから起こる問題などが挙げられるだろう。こうした問題への対応は、これまで基本的には教員個人の能力、資質に委ねられてきた。

今後「宗教文化士」資格の導入も視野に入れて考えると、個人の資質に頼るのではなく大学における宗教文化関連授業全体の質を上げていく取り組みが必要になるだろう。とくに経験の浅い若手教員にとっては、直面する問題の解決や情報交換のための場が必要であると考える。

そこで、科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀）プロジェクトの教材開発の一環として、「宗教文化の授業研究会」を立ち上げ、具体的な授業実践の方法や、情報を持ち寄り、分析、研究を進める。そしてその成果を広く公開し、大学における宗教文化関連授業の充実に資することとしたい。

この研究会は、岩井洋（帝塚山大学教授）、弓山達也（大正大学教授）、平藤喜久子（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所准教授）、黒﨑浩行（國學院大學神道文化学部准教授）の 4 名が世話人となって発足した。

研究会は原稿執筆時点で 3 回を数えており、研究会が運営するメーリングリストには 30 名が登録している。2009 年度に行われた第 1 回、第 2 回の研究会について、その概要をお伝えする。会場はいずれも國學院大學学術メディアセンター 5 階 06 会議室である。

## 第 1 回研究会（2009 年 12 月 26 日）

初回は、研究会発足の必要性と取り組むべき内容について、世話人から問題提起し、参加者から自由に意見を出しあうブレーンストーミング形式で進めた。

平藤氏は、留学生と日本人がともに履修する科目で、現代の日本の宗教をめぐる状況について基本的な知識を得て、社会と宗教との関わりについて考えることを目的とする授業の事例を挙げ、学生からの質問や議論を紹介しつつ、そのような疑問に答えていくにあたり他の研究者に意見を聞きたい点を挙げた。たとえば、問題のある宗教団体を授業でとりあげるさいの距離のとり方、宗教施設に学生を引率するさいの適切な選択、などである。また、特定の事象をとりあげたさいに教室で「笑い」が起こったときの対処や、生命倫理やジェンダーといった多様な価値観をめぐる議論をどのように取り扱うか、といった疑問

も加えられた。

岩井氏は、この研究会で取り組むべきことを「コンテンツ」と「メソッド」に分けて提示した。コンテンツに関しては、前提として大学生の宗教文化に関する基礎的な知識・教養の現状を把握しておくことが重要であるとし、高校の世界史、日本史、倫理の教科書の内容をおさえることを挙げた。実際、民俗宗教に関する語彙（「山伏」など）が意外に大学生に知られていない、という。また、初年次教育のコンテンツの一つとして「カルト問題」を取り上げた。メソッドに関しては、この十年来、FD 活動によるレベルアップが日本の大学教育全般において取り組まれてきたが、そこに宗教特有の問題があるかどうかをさぐる必要があると指摘した。

櫻井義秀氏（北海道大学大学院教授）は、実際に授業で用いているプレゼンテーション資料を紹介しつつ、カルト問題に関して初年次教育のなかで全学的に共有可能な事柄を挙げた。ただし、カルト問題への取り組みは大学によって異なるため、この研究会で取り組むべきは知識の共有であって、対策ガイドライン作成のようなことではないだろうと指摘した。

黒崎は、グループディスカッション形式の授業方法を簡単に紹介しつつ、教室内の相互行為のみでは疑似的、「箱庭」的なものにとどまる点と、担当科目が宗派教育的な目標を掲げているのでそれなりに機能しているが、そうではなくあらゆる価値観に距離を置くところに目標を設定した場合にうまくいくかどうか、という点を指摘した。

参加者からもさまざまな問題が提起された。たとえば、双方向的な授業について、宗教について好き嫌いがある学生はかえって参加しやすいが、宗教に無関心な学生をどう授業参加へと促すか。教職課程科目では「信教の自由」を教える必要があり、そのための授業実践にも注目したい。多様な価値観があることを学ぶさいの教員の立場と相対主義・世俗主義。授業における宗教調査の方法とマナー。学生からの宗教にまつわる相談への対処法。シラバス、教科書、視聴覚教材などの共有は、若手教員にとってありがたい。等々。

議論をふまえて、今後研究会で取り組むべき課題が 4 つ浮かび上がった。(1) カルト問題に関して、宗教文化の授業としてどこまで踏み込むことが妥当か。(2) 学生参加型の授業の工夫とそれにともなう宗教文化教育固有の問題。(3) 宗教調査をとりいれた授業の展開方法と問題点。(4) 価値観や実存的な問いを授業でどう扱うか。そのほか、「宗教学」等の科目でなくとも、宗教文化に関わる文学や映画などをとりあげた授業での取り組みについても、研究会参加者のネットワークを広げていきながら知見を共有したい旨が確認された。

### 第 2 回研究会（2010 年 2 月 28 日）

第 2 回研究会は、「カルト問題をどう教えるか」というテーマのもと、櫻井義秀氏、弓山達也氏、近藤光博氏（日本女子大学准教授）が、それぞれ授業実践例を紹介しながら発題し、議論を行った。

櫻井氏と弓山氏はカルト問題や「カルト」とされる教団の調査研究を行ってきた専門家だが、カルト問題の専門家ではない研究者・教員が、授業でどこまで踏み込んで説明し、学生の疑問に答えていけばいいのかをさぐることを今回の目標とした。発題内容についてはテーマの性格上非公開とされた。議論では、カルトの勧誘方法や予防策を説明するだけでなく、宗教と社会との多様なつながりを取り上げることや、あえてジャーナリズムを素材にしてカルトに関するメディア・リテラシーを構築するといった新たな視点・方法が提示された。

## むすび

2010年度に入ってから第3回「宗教の授業と調査法」（2010年7月4日）を開催し、第4回「調査映像を授業にどう使うか」（2010年9月12日）も開催予定である。また、6月5日に立命館大学で開催された「宗教と社会」学会学術大会総会で、本研究会が「宗教文化の授業研究」プロジェクトとして承認された。以上の詳細は稿を改めたい。

大学全入時代の到来と単位の国際的な通用性向上のために教育の質保証が求められ、そのため各大学でFD活動が組織的になされてきたが、それとは別に、若手研究者・教員の授業運営をめぐる悩み・葛藤の吐露やそれに対する有益な示唆は、研究テーマを近しくするコミュニティのなかでインフォーマルになされてきたように思う。この研究会では、「宗教文化士」資格の立ち上げを機に、後者のような場を目に見える形にして参加者をオープンに募り、宗教文化教育に固有の問題を認識しつつ乗り越えていくことをめざしている。一層の研究者・教員の参加を望みたい。

（黒﨑浩行）

# 第 3 回国際比較神話学会議

2009 年 5 月 23 日、24 日の二日間にわたり、國學院大學学術メディアセンターにおいて国際比較神話学会（International Association for Comparative Mythology）主催、科学研究費補助金による「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者：星野英紀大正大学教授）共催による第 3 回国際比較神話学会議が開催された。

国際比較神話学会は、2006 年 5 月に中国、北京大学において、ハーバード大学と北京大学が共同で開催した比較神話学国際会議（International Conference on Comparative Mythology, Harvard & Peking University）の際に、ハーバード大学の Michael Witzel 教授を会長として、学会としてスタートした。その後、2007 年にはイギリス、エジンバラ大学にて第 1 回が、2008 年にはオランダ、ラーフェンスタインで第 2 回の会議が開催された。そして第 3 回の会議開催にあたって、Witzel 会長より、学会のアジア地域ディレクターである松村一男和光大学教授と北京大学での会議に参加していた本学日本文化研究所の平藤に打診があり、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所とハーバード大学からの後援を受けて、本学にて開催するはこびとなった。

日本には神話学の学会は未だ存在しないが、今回の会議には国内外から 70 名を越す発表者、来聴者があり、神話学への関心の高まりをうかがい知ることができた。また、研究発表以外にも、一日目には日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトが運営している Encyclopedia of Shinto（EOS）について星野靖二助教が説明を行い、さらに星野光樹氏、越智三和氏の協力を得て、祭式教室にて模擬祭式を行い、雅楽も奏していただいた。2 日目には、加瀬直弥講師の案内で伝統文化リサーチセンターの見学会も行った。はじめて神道の儀礼や雅楽の楽器を見たという参加者も多く、それぞれ終了後には活発な質疑応答も行われた。帰国後に運営する HP やメーリングリストで EOS や祭式の紹介をする参加者もおり、神道文化の国際発信を行う貴重な機会となった。

では次に会議の概要を述べる。1 日目の午前には、常磐松ホールにて 3 名の講演者による基調講演会を行った。最初に主催者を代表して松村一男氏より、開会の挨拶があり、引き続き井上順孝國學院大學教授が、歓迎の挨拶及び共催している「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトの紹介を行った。

最初の講演は、国際比較神話学会の名誉会員でもある吉田敦彦学習院大学名誉教授による「大国主神と印欧語族の三機能システム」と題するものであった。長年日本の比較神話学を牽引してきた吉田氏の業績の一つである、日本神話に印欧語族と共通する世界観が反映しているとする指摘を、さらに深めた内容であった。

二人目は国際比較神話学会の会長である Michael Witzel 教授による “Central Asian and Japanese Mythology”（「中央アジア神話と日本神話」）と題する講演である。ヴィッツェル教授はインド学の権威であり、「リグ・

ヴェーダ」の翻訳といった業績がある。今回は、そうした研究の蓄積をもとに、ヴェーダ神話と日本神話の関係について論じた。

三人目の講演者である千家和比古出雲大社権宮司は、「日本神話にみる基層心意:“出雲”の姿相・位相を踏まえて」と題する講演を行い、出雲大社の儀礼、出雲神話にあらわれた日本人の相対性、永遠性を希求する心について具体的な事例を挙げながら論じた。

なお Witzel 教授の講演の日本語訳（松村氏訳）、千家権宮司の講演録は、『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所　年報第 2 号』に掲載されている。

午後は場所を学術メディアセンター 5 階の会議室 06 に移して研究発表が行われた。研究発表は 4 部にわかれ、第 1 部は平藤が司会を行い、Klaus Antoni 氏、（ドイツ、テュービンゲン大学）、Quiros Ignacio 氏（フランス、高等研究院、立教大学）、Ioannis Gaitanidis 氏（イギリス、リーズ大学、駒澤大学）が日本神話をテーマにする研究発表を行った。第 2 部は、ロシア、Academy of Sciences の Yuri Berezkin 氏司会のもと、荻原真子氏（千葉大学）、後藤明氏（南山大学）がそれぞれシベリア、ポリネシアの神話について発表した。

2 日目に行われた第 3 部では、松村一男氏の司会で、丸山顯徳氏（花園大学）、森雅子氏（中央大学）、Yuri Berezkin 氏（ロシ　ア、Academy of Sciences）、Wim van Binsbergen 氏（オランダ、ライデン大学）が、比較神話学的研究の成果を発表した。

第 4 部は、井上順孝氏の司会で「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトによる研究、および関連の研究発表が行われた。発表者は、Steve Farmer 氏（アメリカ）、土屋博氏（北海道大学）、平藤喜久子（國學院大學）、月本昭男氏（立教大学）、Thorsten Pattberg 氏（中国、北京大学）であった。

発表者は、基調講演もあわせ 18 名であった。発表では、日本をはじめ古代オリエント、中国、ポリネシア、シベリアの神話が取りあげられ、また広域な範囲の神話を対象とする

比較研究もあった。古代の神話から現代日本の神話をめぐる問題や脳生理学、コンピューターサイエンスからのアプローチも取りあげられ、方法論的にも広がりのあるものであった。

これまでの比較神話学では、20世紀前半に流行した歴史民族学に顕著であるように、言語や物質文化とともに神話の比較をおこない、文化間の接触、影響を明らかにし、文化、神話の「起源」を求める研究が主流であった。そうした目的を持つなら、これからの神話学は近年の進化生物学、脳科学、人類アフリカ起源説のような遺伝子レベルでの人類史、コンピューターを利用したデータ解析の手法などの成果にも目を配る必要があるだろう。

今回発表、講演を行ったなかでとくに Witzel 氏、Farmer 氏、Berezkin 氏、Binsbergen 氏は、まさにこうした近年の研究を取り入れた神話学の代表的な研究者である。これまでも松村一男氏によって日本でも彼らの研究紹介がなされてきたが、今回の会議により、直接研究成果を聴き、目にし、討議できたことは、日本の神話学にとっても大いに刺激になったと考える。

また、「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトと共催し、日本における宗教文化教育の状況についても議論することができた。教育における神話の取扱いについては、日本における神話教育のように、それぞれの地域固有の問題もあるが、グローバル化時代に求められる神話の知識もあるだろう。そうしたことについて国際的に議論を行う必要もあると思われる。今回の会議がその一歩となれば幸いである。

最後に、第3回国際比較神話学会議の開催にあたっては、國學院大學から学会開催補助をいただいた。また日本文化研究所に後援していただき、多くのスタッフの方々に通訳をはじめとする手助けをしていただいた。そのおかげで大変円滑な会議運営ができ、国内外からの参加者に充実した研究会議を提供することができたこと、心より御礼申し上げる次第である。

（平藤喜久子）

# 「宗教文化士」制度の発足へ向けて

井上順孝

## 1. 構想の背景

2010 年度に「宗教文化教育推進センター」の準備室を、研究開発推進機構日本文化研究所内に設けることとなった。日本宗教学会と「宗教と社会」学会に属する大学教員が中心になって検討してきた「宗教文化士」の制度が発足する目処がついたことに基づく[(1)]。そこで「宗教文化士」という制度を構想したのはなぜか。それは何を目的とするのか。そうしたことについての概略を以下に述べたい。

國學院大學は神道系の大学となっているが、日本には約 200 ほどの宗教系の大学・短大がある。宗教系の大学では宗派教育に類する講義があるのが一般的であるが、それとともに宗教学、宗教社会学、宗教人類学、宗教民俗学といった講義も開講されている。また国公立の大学の一部には、宗教学科もしくはそれに類する学科なりコースなりがある。

しかし残念なことに、日本社会では「宗教」について学ぶということについて、肯定的に受け止めない人が少なからずいる。その主たる理由は「宗教」自体が必ずしも肯定的には受け止められていないことにある。「宗教の勧誘には注意しなさい」というのは、大都市にある大学に入学した子どもに親たちが口にすることの一つとされる。実際どれほどの割合でこのように言われるのか調査例はないが、学生たちが親からそのように言われたというのを直接聞いたことは何度もある。1995 年のオウム真理教による地下鉄サリン以後、いわゆる「カルト」という言葉が広く知られるようになり、「カルト的宗教」に子どもが関わることのないようにという親の側の警戒には、もっともな理由がある。

だが、それだけではなく、日本では以前から「宗教」が否定的に語られる傾向があった。そういう場合の「宗教」には、どうも独特のニュアンスがある。「宗教」は religion の訳語として近代に新しく作られた用語である。たとえば「信心」というような土着的な響きをもった言葉ではない。多くの人が初詣に社寺に参拝しながら、自分は無宗教であると表現するのは、「宗教」が「信心」とは別種の事柄として捉えられているからにほかならない。キリスト教やイスラーム、あるいは新宗教などが「宗教」の典型であって、神社仏閣への参詣は宗教行為には含まれないようなのである。

最近のことであるが、朝日新聞がホメオパシー問題をとりあげる記事の中で、ある女性の言葉を引用していたが、そこに「ホメオパシーは宗教のようなもので洗脳されていた。」というくだりがあった[(2)]。「宗教」と「洗脳」という連想が朝日新聞の記者にも自然に働いたということを示している。

社会がこのような傾向にあるから、学生が「宗教学」の講義を受講するときにも、おそるおそるという事態も生じるのである。つまりある宗教に勧誘されるのではなかろうかという危惧を抱くのである。ほとんどの場合、学生はそれは杞憂であったと分かるようだが、そう

した危惧は依然として社会からは払拭されてはいない。

しかし、現実の社会で起こっていることに目を向けるなら、宗教に対するこれまでのこうした認識のあり方は、けっして好ましくないことだというのが容易に推測される。社会で展開しているのは、グローバル化や情報化がもたらす世界全体の大きな変化のうねりである。その中での宗教がもつ意味の大きさが再浮上していると考えなければならない。

一つ分りやすい例で言えば、イスラームと日本社会との距離の急激な接近である。おそらく、1970年代のオイルショックの前であると、イスラームというのは、中東に広まっている遠い宗教というおぼろげな印象をもつ人が大半であっただろう。しかし、オイルショック以後、石油の輸入先にイスラーム国が多いという現状から、イスラーム理解の必要性が少しずつ高まった。さらにトルコ、マレーシア、バングラデシュ、インドネシアといったイスラーム国からの労働者も見られるようになった。留学生も少しずつ増えてきている。スカーフをかぶった女性の姿もよく目にするようになった。またイスラーム圏の男性と結婚する女性も出てきている。日本で生活しているムスリムが増えると、彼らの子どもたちが日本の学校に通うケースも出てくる。そして、戒律によって給食の内容が問題になるようになったといった話を耳にすれば、もうイスラームはどこか遠くの国の話というふうに考えているわけにはいかなくなる[(3)]。

イスラームに限らず、日本における外資系企業が増えれば、多様な宗教を信じる人びとが日本に住むことにもなる。南アジアから来た人であれば、まずはヒンドゥー教徒、ターバンを巻いていればシク教徒を想定することになろう。アメリカ人であると熱心な福音系のクリスチャンがいるかもしれない。フィリピンから来た人であれば、カトリックである可能性が高い。

他方、日本の企業の国外進出が増えると、多くの日本人が国外で勤務するようになる。国によっては、日本ではあまり気にしなかった宗教に関する社会慣習、戒律、あるいは倫理観などが、より身近な問題として迫ることになってくる。その一方で、日本人の宗教観が問われるケースもある。宗教が話題になったとき、日本の宗教文化についてまったく語れない自分に恥ずかしさを感じたという話は、国外生活の経験者からよく耳にする。とくにアメリカに行った人は、そうした場面に遭遇することが多いようだ。

「宗教」のイメージは日本ではあまりよくないという現実があったとしても、グローバル化の進行は、「宗教」についての基本的素養を身につける必要性を増やしていると考えざるを得ない。大学で宗教について教える立場にある人間は、こうした事態にどのように対処したらいいのであろうか。「宗教文化士」構想をもった背景には、こうした現状認識があったのである。

## 2.「宗教文化」とした理由

「宗教文化」は「宗教」の一部であり、生活に深く関わるものである。しかし、宗教文化士として「文化」を強調したのは、実際に教えることが宗教文化が中心になるということの他に、別の社会的理由があった。それは日本では「宗教」という言葉のイメージはあまりよくないけれども、「宗教文化」という言葉のイメージは、肯定的な評価がぐっと増すという事実である。これはいくつかの調査によっても裏付けられたことである。

ウェブ上に「イー･ウーマン」というサイトがある。ユニークなサイトで、毎週6つのテー

マについてメンバーに賛否を問いかけ、ウェブ上で結果を毎日示していくというサーベイを長く続けていた[(4)]。メンバーにはキャリアウーマンが多いが、男性も含め誰でも自由にメンバーになれる。このサイトのサーベ－イヤー役をこれまで20回余依頼されたのだが、2006年3月に「学校教育で宗教文化教育は必要でしょうか？」という問いかけをしたことがある。問いかけの背景として、日本人は公立の学校教育においては、あまり宗教に触れないようにしているのが現状で、とくに異文化理解の一環として、生きた世界の宗教文化を知ろうとする姿勢は乏しいのではないかという旨の指摘をしておいた。その上で、公立学校を含めた学校教育の場で、宗教文化教育を導入することの賛否を問うたのであった。

問いかけには単純にYESまたはＮＯで答えることになっているのだが、結果は、YESが777票（78.6％）、NO が211票（21.4％）であった。8割近い人が宗教文化教育に賛成という結果になった。6つのテーマが同時に並べられて、関心のあるテーマに回答する形式なのだが、2番目に回答者数が多く、関心も高かったことが分かる。回答した人の中には具体的意見を付す人もいるのだが、そのうち代表的な3つほどを示しておく。

「宗教を知らないから、偏愛したり偏見を持ってしまいます。触れないようにしていることが、宗教を余計に難しいもの、コワイものにしているのではないでしょうか。一歩引いたところから、結局何なのか、どういう考え方なのかなどを教えることは必要だと思います。それがベースにあることで戦争、社会、政治のみならず、修学旅行や美術鑑賞などにも理解、関心、意見などを持てるようになるのだと思います。」（東京・40歳）

「海外へいくとさまざまな違った文化・風習に触れ、それらが宗教の影響を受けていることに気付かされます。歴史を知るとともに、背景にある宗教を知ることは、必要なのではないでしょうか。ただし多感な時期の子どもたちに偏見を持たせないよう、教え方にはかなり工夫が必要だとも感じます。先生の考えに多大な影響を受けたことを、自分でも実感するからです。」（イスタンブール・30代）

「宗教教育は布教ではなく、宗教とは何なのか、なぜあるかなど、良し悪しに関わらず、人間の基盤となっている文化を理解するためのものだと思います。正しい宗教教育をしていくためには、宗教の知識を与えることにとどまらず、また宗教の範囲にとどまらず、自ら考え、価値基準を作り、判断する力を身に付ける教育がなされていることが必須だと考えています。」（埼玉・33歳）

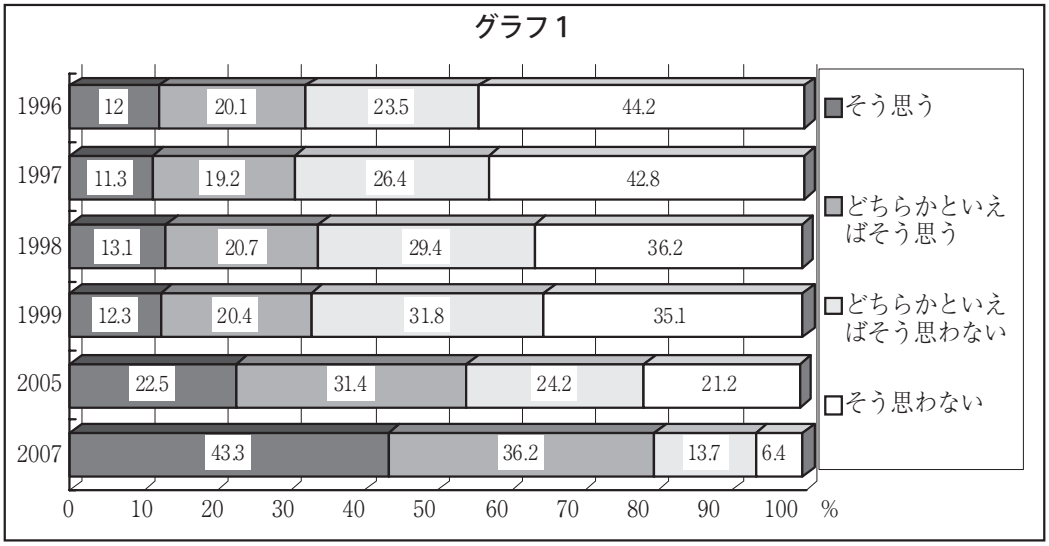
もう一つ事例をあげたい。「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと國學院大學日本文化研究所のプロジェクトが合同で行なってきた学生に対するアンケート調査の結果から分かったことである[(5)]。これは1995年以来2010年まで、毎回数千人を対象にすでに10回にわたって行なわれている大がかりなアンケート調査である。1996～1999年と、2005年、及び2007年に実施した調査では、宗教文化教育に関連した質問を設けた。それぞれ以下のような意見について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4つの選択肢から選んでもらった。

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」（1996～1999年の調査）
「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」（2005年の調査）

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」（2007 年の調査）

結果はグラフ 1 に示すとおりである。1996 年～ 99 年は、同じ質問であったが、回答の結果もほぼ同じ傾向で､「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という肯定的回答は 3 割少々である。強いていえば、「そう思わない」という否定的意見が減少傾向にあった点が変化である。

しかし、2005 年に「宗教についての基礎知識」を「世界の宗教についての基礎知識」に変えると、肯定的回答は一挙に 5 割を超した。さらに 2007 年に「日本や世界の宗教文化」という内容にしたら、肯定的回答がほぼ 8 割になった。「学んだ方がいい」というやわらかな表現に変えたことも関係すると考えられるが、それでもこの一連の結果から、宗教文化という言葉は宗教という言葉より肯定的なイメージがずっと強いと理解していい。




## 3. システムの構築

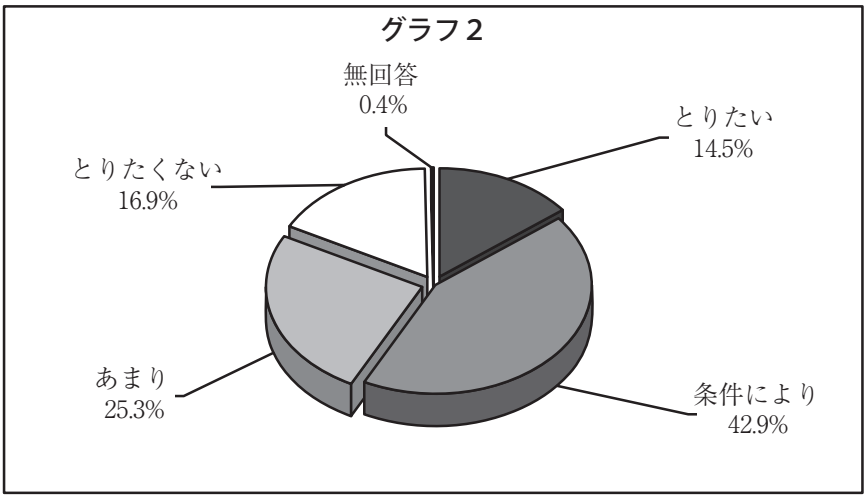
宗教文化教育がより多くの人に受け入れられやすいものであるとしても、「宗教文化士」という制度を学生たちはどう受け止めるであろうか。科学研究費補助金による調査・研究が始まった 2008 年度に、学生を対象にして宗教文化士に対するいわばニーズ調査を実施した。結果については報告書が作成されているので、詳細はそちらを参照していただきたいが [(6)]、ここでは仮に「宗教文化士」の制度ができた場合、この資格をとりたいと思うかどうかについての結果だけを紹介しておく。

アンケートでは、宗教文化教育の内容と宗教文化士の資格の概要について説明したのち、次のような質問をした。

大学で一定の単位（12 ～ 20 単位程度）をとり、最終試験に合格した場合に、「宗教文化士」の資格を与えるという計画があります。　あなたはこの資格をとりたいと思いますか。

その結果はグラフ 2 に示した。38 の大学から有効回答が 5,005 名分得られたが、「とりたいと思う」という積極的な回答は 727 名（14.5％）で、「条件（単位、取得費等）によってはとりたいと思う」という比較的肯定的な回答が 2,147 名（42.9％）であった。合わせると 57.4％は、この制度を肯定的に受け止めたと理解していいだろう。なお、条件についても別途聞いているのだが、その結果を参照しながら、必要な取得単位はその後 16 単位となった。

このニーズ調査は、こうした制度への潜在的なニーズは一定程度あることを示している。アンケート調査の対象がもともと宗教関連の授業をとっている学生が大半であったので、それも当然かもしれないが、宗教とはまったく関係ない授業をとっている学生も回答者に含まれている。そうした学生でも 3 割以上が肯定的な回答をしているので、宗教文化教育について関心はあるし、宗教文化士の制度は宗教文化教育を学ぶ上での、一つのインセンティブになりうると判断したのである。




学生の側に一定のニーズがあることは分かったが、宗教文化教育を効果的に推進するには、教員の側が教育法について研究していくことが必要になる。それにあたっては、関係する大学に勤務している教員間の協力が不可欠になる。学問においては、師資相承的な教育は一部の分野においては継続されるであろうし、その重要性に疑問を投げかけるものではない。しかし、現在のような大学教育のシステムの中では、より多くの学生に実質的な教育、つまり学んだ学生がなんらかの手ごたえを感じるような教育方法を追求していくこともまた必要である。

宗教というのは、時代的な広がり、地位的な広がり、また宗教ごとの多様さと、途方もない多様性をもった対象である。この概要を把握するというだけでも、とうてい一人の教員がなしえることではない。これに加え、昨今は情報化が激しく進行する時代である。この特性を教員たちも活かすという発想を導入せざるを得ない。学生たちは多くの場合、教師たちに先んじてインターネット情報を日常的に活用しているようになっている。中には不適切な利用法も広がっている。典型的なのはウィキペディアの記事をそのまま引用して、自分の意見のようにして提出するというやり方である。これがなぜまかりとおっているかというと、教

員の中にインターネットについて十分知識がない人がいるからである。ウィキペディアの利用ということについて想像ができない人がいるので、学生はこれでもいいと考えたり、教員は分かりはしまいと高を括ったりするのである。

ネット情報の利用には、当然分野ごとの特殊性を加味しながら、情報リテラシーを教えることが必要なのであるが、そのようなことができる、あるいはそれが必要だという意識をもつ教員が、必ずしも多数派とは言えないのが現状である。宗教学関連の教員でもそうである。これは教員の年齢とかなりの相関性をもつ問題であるので、しだいに事態は改善される可能性がある。しかし、また新たな情報ツールの展開があれば、やはり教員側の対応が遅れるということが繰り返されるとも考えられるのである。

そのようなことは現代の情報環境の中では避けがたいとすれば、事態を少しでも改善するために求められるのは、教員同士の適切なネットワーク形成である。そのネットワーク形成にも、ネットの利用は大前提となる。宗教文化教育推進センターは、そうしたネットワークの形成、情報の共有ということも視野に入れている。

宗教文化教育を深めていく上では、現在すでに各大学で行われている宗教学関連の講義を前提とするとともに、独自の教材や教育法についても、関連する教員が協力態勢を作っていくことが必要になる。すでに 2009 年度から、そのための研究会も発足している [(7)]。

最後に宗教文化士認定の具体的プロセスについての当面の案を示しておくと、各大学で宗教文化に関連する講義を 16 単位以上取得した学生が認定試験を受験する資格があり、認定試験に合格すると宗教文化士として認定されるという方式が予定されている。どのような科目が宗教文化教育に関連するかは３つの到達目標を示し [(8)]、ガイドラインとしている。そして認定試験は宗教文化教育推進センターが母体となって実施する予定で、その組織案や試験の方法なども、おおよそ固まっている。

宗教文化教育が現代社会で一定の意義をもつことは明らかであるが、その意義がどれほどのものと社会に認知されるかは、教育の内容と方法に大きく依存する。その内容と方法とが社会、とくに学生を受けいれる側の企業や、国や地方の行政関係者といった人びとのこの問題に対する認識にも、大きな影響を与える。科学研究費補助金による研究を実施する中で、多くのシンポジウム、フォーラム、研究会の類を開催してきたが、時代に合った教材の開発や教育法の開発、そして研究機関や教員相互のネットワークの形成の重要性は強く感じられた。現在２つの学会がこの制度に連携しており、先駆的に制度導入を図る「パイロット校」が、国立、私立を合わせて８校あるわけだが、当然のことながら、将来的には連携する学会や積極的に参入する大学が増えることを見込んでいる。

新しい試みであるので、しばらくは試行錯誤的な場面も生じることになろう。しかしながら、目指すところはきわめて明確であるので、宗教文化教育を実質化していくことに、より多くの教員の関心が深まることを期待したい。

注

(1) ２つの学会での検討の経緯の概要は次のとおりである。2007 年度に「宗教と社会」学会総会において、ワーキンググループを設けて、宗教文化士の制度構築を検討することが承認された。同年日本宗教学会総会において、宗教文化士（仮称）検討委員会を設置し、同様に検討をすることが承認された。ワーキンググループのメンバーは、磯岡哲也、稲場圭信、井上順孝＜責任者＞、

櫻井義秀、佐々木裕子、中牧弘允、山中弘の７名、また検討委員は、井上順孝＜委員長＞、大村英昭、澤井義次、塩尻和子、田中雅一、土屋博、藤原聖子の７名となった。

同年、この制度化を実質的に進めるために科学研究費補助金の申請がなされた。星野英紀大正大学教授を研究代表者とする「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」というテーマでの、2008 年度より 2010 年度の３年間の研究が採択された。この研究では有機的に調査・研究を進めるために、約 30 名のメンバー（研究代表者、研究分担者、連携研究者）を、教材研究、カリキュラム研究、ニーズ調査、国外・国内の現状調査や国際的ネットワークの形成などを行なう７つのグループに分けた。

この研究の成果を踏まえて、2010 年度の「宗教と社会」学会総会（6 月）、及び日本宗教学会の総会（9 月）において、「宗教文化士」制度に関し、学会が連携学会になることを提議し、それぞれの総会で承認された。なお、2011 年から予定されている認定業務は、宗教文化教育推進センターという独自の組織を設立し、そこで行なうこととなっている。

(2) 朝日新聞 2010 年 8 月 25 日の社会面の記事である。「医療敬遠に危機感」という見出しで、記事の中には次のような文章がある。

日本学術会議が最も懸念するのは、ホメオパシーが通常の医療から患者を遠ざけてしまう点だ。30 代の女性もそんな一人だ。「ホメオパシーは宗教のようなもので洗脳されていた。どんな症状でも過去のトラウマと結びつけて説得され、泥沼にはまってしまった」

(3) 上記科学研究費補助金による研究では、2010 年 10 月 2 日に國學院大學研究開発推進機構との共催で、「現代イスラームと日本社会」という講演会（小杉泰京都大学教授）を、また翌 3 日に同日本文化研究所との共催で「イスラームと向かい合う日本社会」という国際研究フォーラムを企画した。いずれも日本社会が少しずつイスラームと関係を深めているという現状を認識してのものである。

(4) 下記に過去のサーベイのアーカイブがある。

http://www.ewoman.co.jp/

なお、2010 年 7 月以降は新しいメンバー制のもとでの投稿形式になっている。

(5)「宗教と社会」学会と日本文化研究所の合同の意識調査の結果は、いずれも報告書として刊行されている。

『「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 1 回アンケート調査報告』1995 年

『「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 2 回アンケート調査報告』1996 年

『「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 3 回アンケート調査報告』1997 年

『「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 4 回アンケート調査報告』1998 年

『日韓学生宗教意識調査報告』（「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 5 回アンケート結果／第 1 回韓国学生アンケート結果）1999 年

『日韓学生宗教意識調査報告』（「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 6 回アンケート結果／第 2 回韓国学生アンケート結果）2000 年

『「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第 7 回アンケート調査報告』2001 年

『第 3 回日韓学生宗教意識調査報告』2005 年

『第 4 回日韓学生宗教意識調査報告』2008 年

(6)『宗教文化教育に関する学生の意識調査報告書』（大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学発行、2009 年 2 月）

(7) 上記科学研究費補助金による研究の一環として立ち上げられたもので、「宗教文化の授業研究会」という研究会である。同研究会は 2010 年度「宗教と社会」学会の総会で新規プロジェクトとして認められた。

(8) 到達目標は次の３つとした。

1) 教えや儀礼、神話を含む宗教文化の意味について理解ができる。

2) キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、仏教、神道などの宗教伝統の基本的な事実について、一定の知識を得ることができる。

3) 現代人が直面する諸問題における宗教の役割について、公共の場で通用する見方ができる。

研究論文

# グローバル時代と企業にとっての宗教文化

井上順孝

## 1. 企業と宗教問題

グローバル化が進行するなかで、日本企業も世界の多様な宗教文化に接する機会が増えている。日本人社員が国外で勤務する機会が増加し、外国人社員の割合も増加している。また、製品を販売する国も多様化してきているからである。多様な宗教文化に接する機会が増えるということは、宗教文化の違いによって生じる行き違いや、反感、トラブルというものが増える可能性を孕んでいる。

たとえば食品加工一つを例にとっても、日本では、食の戒律は非常に稀であるので、日本人を対象としている限り、生産過程や販売の際に、宗教上の戒律を考慮するということは、ほとんどない。しかし、食べ物に関する多くの戒律があるユダヤ教や、とくに豚のタブーが厳しいイスラーム、あるいは牛肉を忌避するヒンドゥー教というように、食べ物に関する宗教的戒律は多くの宗教にとって重要な問題である。それぞれの宗教の信者が多い地域では、こうしたことに無頓着であると、大きなトラブルに巻き込まれたり、商品のボイコットを受けたりしかねない。

2000 年末に起こった「味の素事件」は、このいい例である。インドネシア味の素社が、東ジャワの工場で、味を引き出す酵素を作るためのバクテリアの培養に、本来使われる牛肉ではなく、豚肉から抽出した成分を使用したことが分かったのが発端である。戒律をチェックするイスラームウラマー評議会の指摘によって、製品回収を求められることになったのである。翌 2001 年、日本でもこの事件は大きく報道された。

イスラーム圏で食品を販売するには、それがハラル（許可されたもの）と認定されなければならない。味の素はハラルと認定されていたわけだが、この事件のときに、ハラム（禁止されたもの）になるという糾弾を受けたのである。一時は工場閉鎖、日本人責任者の身柄拘束という事態にまで発展したが、日本では、なぜこのような騒ぎへと発展するのか、その背景を直ちに理解したという人は少数派ではなかろうか。

宗教と食べ物に関する戒律は、古くから知られているけれども、最近は従前にはなかったような分野での問題が浮上してきた。代表的なものとして、ゲームソフトに絡んだ宗教問題がある。2007 年 6 月に、ソニーの「プレイステーション 3」用ゲームソフト（「レジスタンス―人類没落の日」）にイギリス国教会が抗議をした。戦闘場面にマンチェスター大聖堂が無断で使用されているというのが理由であった。国教会の態度は当初なかなか強硬で、もしソニーが謝罪やソフトの販売停止などに応じないなら、法的措置も辞さないという構えであった。ソニーが正式に謝罪したことによって、収束の方向に向かったが、教会側はソフトの回収を訴え続けていく意向を示した。

この事件の翌年の 2008 年、今度はソニー・コンピュータ・エンタテインメント（ＳＣＥ）

が問題を起こした。「プレイステーション3」用ゲームソフト「リトルビッグプラネット」内で用いられている音楽の歌詞に、コーランの一節が含まれていたことが判明したのである。同社は、海外でのソフトの発売を延期して曲の一部を削除する対応をとった。ただ日本では予定通り発売された。

同じ2008年には、集英社出版の人気アニメ「ジョジョの奇妙な冒険」のＤＶＤに、イスラームを侮辱する内容があることが明らかになった。アラビア語圏のウェブサイトで批判が高まったので、原作コミックスの出版元でアニメ制作も主導した集英社は、問題のあったアニメＤＶＤと原作コミックスの一部出荷停止を決定した。問題となったのは、敵役がイスラームの聖典であるコーランを読みながら主人公の殺害を指示したり、イスラームの礼拝所であるモスクが破壊されるなどの場面が含まれていた点である。

外務省もこの問題を重く見て、5月に「イスラーム教徒の感情が傷付けられたのは遺憾であり、異なる宗教や文化への理解をはぐくみ、再発しないようにすることが重要」との外務報道官談話を発表した。

これらは新聞でも報道され、多くの人が知るところとなったが、報道されない小さなトラブルが起こっているかもしれない。企業にとって、宗教の違いがもたらす習慣、感覚、忌避感の違いを意識しなければならないような場面は、少しずつ増えていると言っていいだろう。

とはいえ、宗教が関わる問題は、実際には国によっても、地域によっても、また内部のグループによっても異なる。イスラームは各指導者が発するファトワ(宗教令)が影響力をもち、同じ問題でも指導者ごとに異なったファトワが出されることは珍しくない。実は先ほどの味の素の問題では、ウラマー評議会のファトワを当時のワヒド大統領が否定するという事態になった。いろいろな思惑が絡んでいたと考えられるが、つまり常に同じ尺度ではないのである。

イギリス国教会の反応も、キリスト教会の一般的な反応とは言い難い。ゲームではないが、映画では反キリスト教的なものは数多くある。少し古くなるが、1988年の映画『最後の誘惑』では、イエス・キリストがマグダラのマリアと交わる想像をするシーンなどがあり、上映禁止運動が起こったりした。2006年の『ダ・ヴィンチコード』も、カトリック教徒の多く国では、やはり上映禁止運動が起こったりした。

したがって、宗教側の基準もまちまちだから、あまり神経質になることはないといった態度をとっておくのも、企業としては選択の一つかもしれない。しかし、それでも最低限の宗教文化に関する知識を得ておくという態度は、今後より強く求められることになろう。急速なグローバル化と情報化の進行があり、異なった宗教文化が接する割合は格段に増しており、また異なった宗教文化に対する基本的な配慮の欠如が、大きな問題を引き起こす確率は高くなっているとみなすべきであるからである。また企業のリスク管理という点からも、考慮せざるを得ない事柄になりつつあるからである。

では、企業にとって宗教文化に対する配慮というのは、具体的にどのような形で進めていくことができるのだろうか。これについての現状に即した研究はまだ数少ない。また、現実の変化の方が、企業関係者のみならず、多くの宗教研究者の認識をはるかに超えて急速に進行していると考えていいだろう。そこで本稿では、こうした問題と取り組むための足場を築く上での一つの試みとして、アンケートによって企業の側の意識を探り、また現実に生じつつある問題の性格について、ここ20年ほどの一般紙や専門紙など各種の新聞記事の概括か

ら探ってみたい。

## 2. 企業に対するアンケート調査

日本の企業は、宗教文化ということに対して、どのような意識を抱いているのか。これを調べるのはなかなか難しい。先行研究はほとんどないので、面談調査にしても、アンケート調査にしても、方法や内容は、ほとんど一から構築しなければならない。幸い、2009 年度に國學院大學特別推進研究助成金[1]を得ることができたので、その研究の一環として、企業に対するアンケート調査を実施することとした。前例のない調査であったので、どのような方法にするかを調査メンバーで検討して、質問内容はごく基礎的な事柄に絞り、できるだけ多くの企業から意見を得ようという方針で臨んだ。

日本には多くの企業があり、東証の上場会社だけで約 2,300 社にのぼる。また企業にはさまざまな部署がある。どこに調査票を発送するのが適切か、という問題もあった。送付対象と送付方法については、企業関係者によるアドバイスを受けることができた[2]。その結果、上場企業の大半を占める 2,200 社の人事課宛に調査票を発送することとした。

今回の調査の目的は大きく次の２つとした。

（1）企業が現在、宗教文化に関連した諸問題に、どの程度直面しているか。

（2）企業では今後の大学卒採用者に対し、宗教文化についてのどのような基礎的素養を求めているか。

これに対応させる質問を 6 つ用意した。質問票の内容と、調査結果の概要については、すでに報告書を作成しているので[3]、ここでは、その結果のうち、とくに注目すべき点についていくつか言及したい。

まず、企業のこの問題に対する関心は、現段階ではあまり高くないということがうかがえる。アンケートは 2,200 社に配布されたが、回答があったのは 124 社で、回答率はわずか 5.6% である。もともと郵送法によるアンケート調査は回収率が低いのが通例であるが、それを考慮しても低い方に属する。質問内容が宗教に関するものであったことから、企業が答えづらかったということもあるかもしれない。

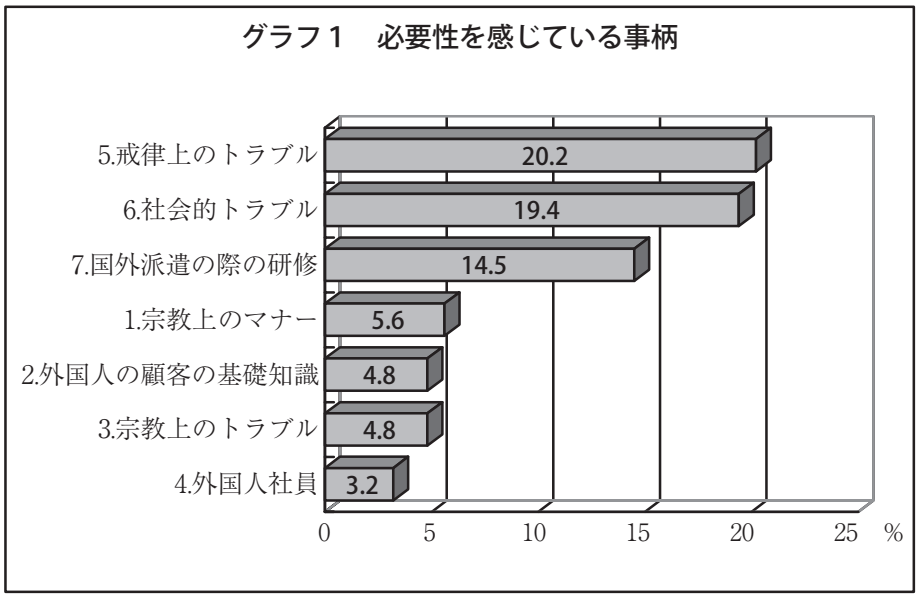
回答があった 124 社の回答内容を見ても、まだ宗教に関わる事柄を重視しているという傾向はさほど強くない。ただ、一部には、宗教文化の問題を考慮する時代になったということを認識しているような回答もあった。とりわけＩＴ系の企業など、時代の最先端を行くような企業において、そうした例が若干見られた。

以下、質問への回答からうかがえる特徴的な点を見て生きたい。質問 1 では、企業が宗教に関わる事柄で、必要性を感じていることがどの程度あるのかを知るための質問をした。「貴社で次のようなことの必要性を感じたことがありますか。」と問い、以下の 7 つの選択肢をあげておいた（複数回答）。

1. 社員・従業員に、接客に際しての宗教上のマナーを学ばせる社内の部署
2. 外国人の顧客・ユーザー等に関係する宗教的な基礎知識について情報を収集している社内の部署
3. 社員・従業員の間の宗教上のトラブルを防ぐためのリサーチをする社内の部署
4. 外国人社員についての宗教上のマナーを学ばせる社内の部署
5. 商品に関して、宗教の戒律からくるトラブルを未然に防ぐための情報を提供する信頼で

きる民間団体
6. 社会的トラブルの多い宗教団体についての情報を提供してくれる信頼できる民間団体
7. 国外に社員・従業員を派遣するときに、宗教的な基礎知識を与えるための研修をしてくれる団体

宗教的な問題に対処するための社内の部署あるいは外部の団体の必要性を聞くのが主旨であった。結果はグラフ１に示したようになった。回答の多かった順に並べてある。



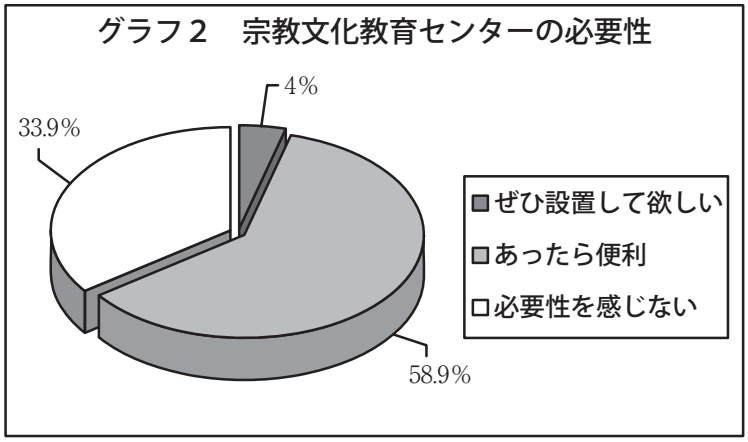

上位を占めた５～７は、いずれも問題を処理するための外部の団体の必要性に関する事項である。これから推測されるのは、社内で宗教問題に対処する部署を設ける必要性はあまり感じていないが、宗教の基礎的を学ばせてくれたり、宗教上のトラブルに対処してくれる外部の団体の必要性はある程度感じられているということである。また、回答した企業の担当者は、宗教をめぐる問題は、会社ごとの対処の限界を超えたものであるということを感じているのかもしれない。

それが次の質問２と質問３に関わってくる。質問２は「これまで、宗教に関するトラブルや処理に困ったことで、外部に相談機関があったらいいと思ったようなことがありますか。ありましたら、差し支えない範囲で、なるべく具体的にお教えください。」というもので、宗教に関するトラブルに的を絞っている。これに関しては大半が「なし」と答えている。具体的に記入したのは８社だけである。

３番目の質問では、相談センターのようなものを必要と感じているかどうかを聞いた。「日本や世界の宗教文化に関する基礎的な情報をオンラインで得られるようなセンターの設置が、宗教文化教育に関連して検討されています。貴社の場合、そういうものの必要性は次のどれにあたりますか。」

回答の選択肢は、「1. ぜひ設置して欲しい」、「2. あったら便利かもしれないと思う」、「3. 必要性を感じない」の３つである。結果は、グラフ２のとおりである。「ぜひ設置して欲しい」

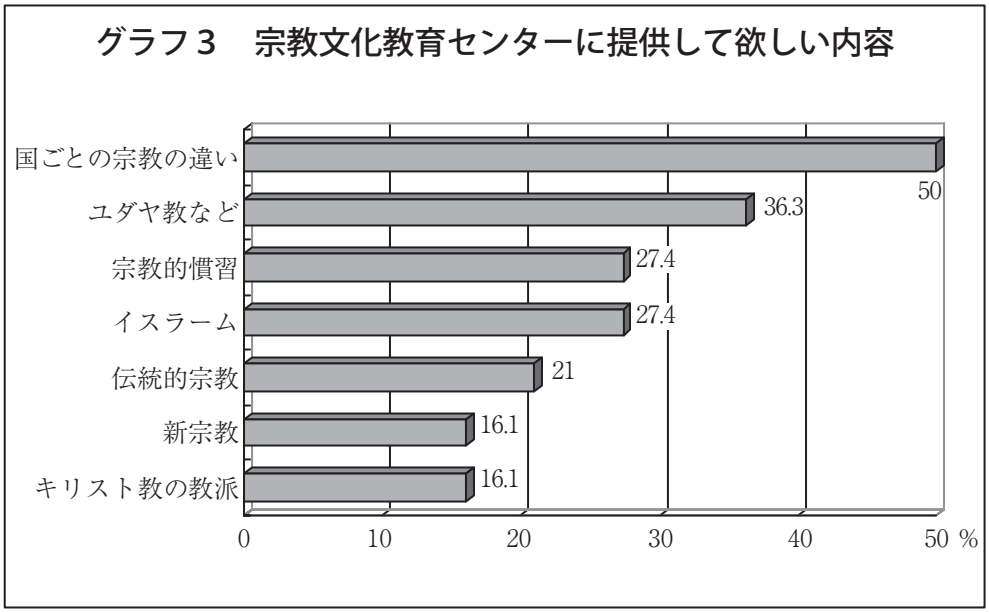
というのは4%に過ぎないが、「あったら便利かもしれないと思う」は58.9%で過半数になる。逆に「必要性を感じない」は33.9%で、約3分の1である。もっとも多かった「あったら便利」という感覚に、企業にとっての宗教文化への距離を推定することが可能である。




では、少なくとも「あったら便利かもしれないと思う」場合は、どのような内容だと便利だと感じるかを調べるため、質問4で次の8つの選択肢を用意して選んでもらった（複数回答）。

1. 日本の伝統的宗教（神社、寺院）の歴史や現状の概要
2. 日本の新宗教（新興宗教）の概要
3. 日本の伝統的な宗教的慣習の基礎的情報
4. イスラームの戒律・教えなどについての基礎的情報
5. ユダヤ教、ジャイナ教、ヒンドゥー教など、戒律に気をつけた方がいい宗教についての基礎的情報
6. キリスト教の教派別の特徴の違いなどの基礎的情報
7. 国ごとの宗教的違いについての基礎的情報
8. その他（具体的に：　　）

その結果は、グラフ3に示した。回答が多い順に並べたが、「国ごとの宗教的違いについての基礎的情報」がもっとも多かった。約半数が選んでいる。国ごとの宗教的違いといった、一般的な表現での質問であったので、選んだ人も多かったのかもしれないが、国ごとに宗教文化が異なるということの認識とそれへの対処法の必要性については、しだいに意識が高まってきているというふうに理解できるかもしれない。二番目が「ユダヤ教、ジャイナ教、ヒンドゥー教など、戒律に気をつけた方がいい宗教についての基礎的情報」であったが、やはり気をつけなければいけない強い戒律をもつ宗教者の存在も意識されてきているのであろう。全体として国内の問題よりも、国外の宗教文化についての情報を必要としていることが分かる。




人事課へのアンケートということもあって、質問の最後に、宗教文化教育に関して、大学教育においてどの程度学んで欲しいと思っているかについての意見を求めた。質問５を「宗教文化教育に関する研究チームでは、大学における宗教文化教育として、次のようなものが含まれると想定しています。そのようなことを学んだ学生について、貴社の立場からは、どう考えるかを、個々の項目についてお答えください。」とし。次のような選択肢を設けた。そして、それぞれについて、「1. なるべく学んでおいて欲しい」、「2. 学んでおいてもらった方がいいかもしれない」、「3. とくに学んでおかなくていい」のいずれかの番号を選んでもらった。

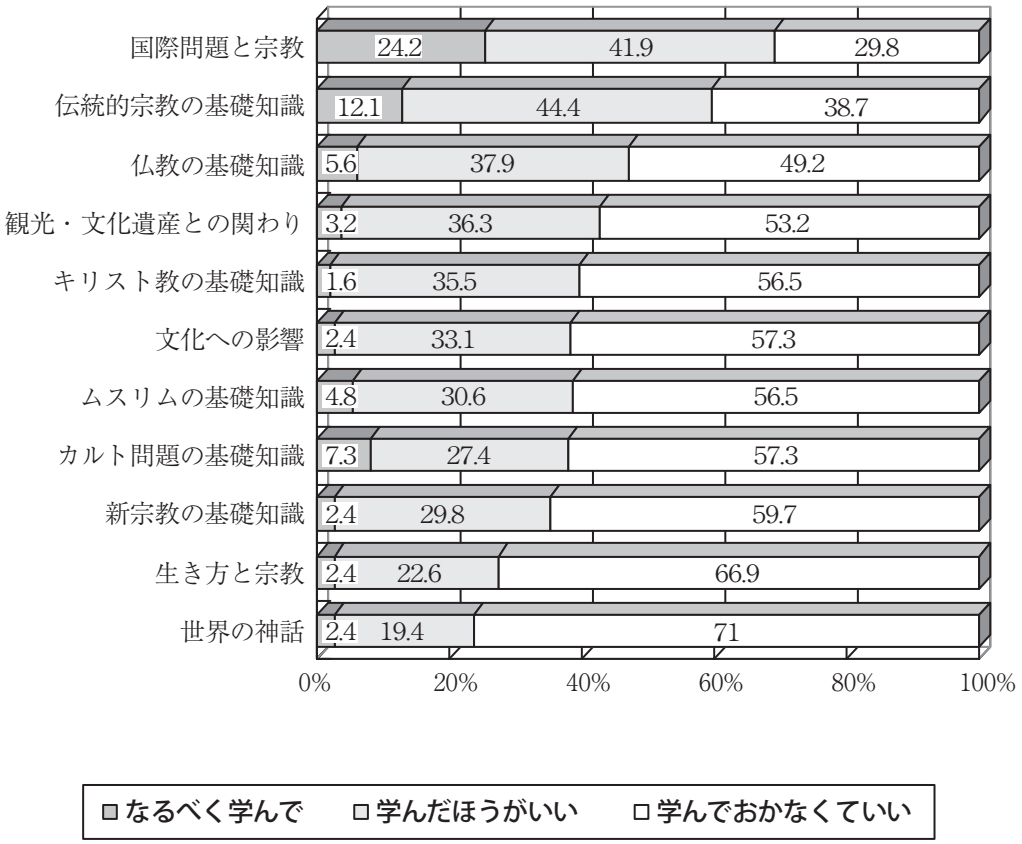
「神道と仏教に関係する日本の伝統的宗教のしきたりについての基礎的な知識」
「新宗教（新興宗教）と呼ばれている、近代以降の新しい宗教についての基礎的な知識」
「キリスト教徒の生活の特徴についての基礎的な知識」
「暮らしの中に仏教がどう関わっているかについての基礎的な知識」
「ムスリム（イスラム教徒）の戒律と実生活についての基礎的な知識」
「宗教が文学・音楽・美術・建築・映画などの文化に与えた影響についての基礎的な知識」
「宗教と観光・文化遺産との関わりについての基礎的な知識」
「世界の神話についての基礎的な知識」
「社会の出来事や国際問題と宗教との関わりについての基礎的な知識」
「現代のカルト問題についての基礎的な知識」
「生き方や死後の世界などについての、それぞれの宗教の教えの違い」

回答の結果はグラフ４のようになった。「1. なるべく学んでおいて欲しい」と「2. 学んでおいてもらった方がいいかもしれない」を合わせた回答数が多かった順に並べてある。

もっとも多かった答えが「社会の出来事や国際問題と宗教との関わりについての基礎的な知識」で、１と２を合わせて、約３分の２に達する。次いで「神道と仏教に関係する日本の

伝統的宗教のしきたりについての基礎的な知識」が５割強であった。２番目が伝統的な宗教のしきたりになったのは注目される。これまでの質問では国外の宗教が強く意識されていたが、大学での教育では自国の宗教文化についての教育も重要であると考える回答者が一定程度いるということである。３番目が「暮らしの中に仏教がどう関わっているかについての基礎的な知識」であるから、そのように理解するのが適切である。

**グラフ４　大学教育において学んで欲しい事柄**




大学教育で学んでおいて欲しい事柄については、補足的に質問６で自由回答の形式で意見を求めた。「貴社の立場からして、大学教育で学生に宗教文化について、もっと学んでおいて欲しいと思う事柄がありましたら、自由に記述してください。ない場合は、「なし」とご記入ください。」という質問である。

具体的に回答があった企業は 22 社であった。それを見ると、宗教についての常識な事柄を学んで欲しいという内容のものが大半であったが、そのうち半分ほどは外国の宗教を意識したもので、残りは日本の宗教を意識したような内容であった。外国の宗教をしたものは、食生活や生活習慣の違いについての知識、いろいろな宗教に対する基本的マナーや常識、さ

らには互いが尊重し合えるような基本的知識というような回答である。また日本の宗教を意識したものは、道徳的な教え、伝統的しきたり、あるいは教訓の類、冠婚葬祭など宗教が関係した作法といった回答である。

この具体的回答を記入した企業の中に情報処理関連の会社が数社あった。東京都にあるインターネットサービス関連の会社は、「大学よりは高校教育で学ぶべきでは」という意見を寄せている。宗教についての教育をそれほど必要と感じていない企業が多いけれども、こうした認識をもつ人も少数ながら存在することが分かる。

今回のアンケート結果から、日本の企業の趨勢に関して明確な結論を導くのは困難である。得られた回答の絶対数が少ないし、質問項目もわずかである。回答しなかった企業について、この問題を等閑視していると結論づけるわけにもいかない。ただ、少数ではあっても、回答結果からは、社員が宗教文化への注意を払うことが今後必要性を増すだろうと考えている企業が少しずつ出てきているという推測が成り立ちそうである。とりわけ基本的な知識やマナーくらいは知っておいて欲しいといった意見が目立ち、また何かあったときに相談できるような外部の団体があれば便利であるという考えも過半数を占めた。

### 3. 企業が関わった宗教トラブル

企業が実際に宗教問題と直面する割合はどの程度なのかは、これからいろいろな形での調査を重ねる必要がある。ここで留意したいのは、明らかに宗教が関係したトラブルなり問題であっても、それが宗教に関わっているという認識自体がない場合もある可能性である。

この点は、「宗教文化を広い視点から考える研究会」[(4)] において、何度か企業関係者を招いて話を聞いたときに感じられたことである。企業関係者であると、労働意欲、勤勉さ、契約観念などは、世俗的な問題として完結させるのが普通である。約束を守らないのは、契約観念がルーズである。「アッラーの思し召し」などという言い逃れは責任放棄である。そうした見方が主流である。

しかしたとえばムスリムにとって勤務時間であっても祈りを優先することがあるとか、「神の意思」という思考法は身になじんだものであるとか、あるいはインドにおけるカースト概念が作用したある労働の拒否などということがある。こうした場合に、世俗的な感覚だけで対処すると、かえって相手の反感を買いかねない。ところがそのように宗教文化がもたらす思考法の特徴ということをほとんど配慮しない企業関係者がいたからである。

その人が属する宗教文化についての知識がまったく欠けていれば、あるトラブルが起こったとき、そこに宗教の問題が絡むかどうかの判断はできない。冒頭に述べたソニーの例にしても、これだけ世界的に事業を展開している企業であっても、当該事業の担当者に、宗教問題を考慮するという視点そのものがきわめて乏しかった可能性がある。

こうしたこともあるので、実際に日本の企業が起こしたトラブルから、この問題を考える手がかりを得たい。これについては、高橋典史・藤野陽平による「企業活動と宗教をめぐるトラブルに関する研究序説」という事例紹介があるので[(5)]、まず、これを参照しながら、ここ 10 年ほどの間に起こったいくつかの問題の背景を考察する。

高橋と藤野は宗教情報リサーチセンターのデータベースを分析して、最近 10 年間の国内外の事例を中心的に取り上げ、それらを次の 4 つのパターンに整理している。

⑴「伝統宗教と企業活動とのあいだで発生したトラブル」である。伝統仏教に関しては、

仏教的な文化資源の一般企業による利用（誤用）への伝統仏教界の側の警戒や反発が起因となっている。また、神社神道については、各地の神社の宗教活動の市場経済への接近の動きとそれに対する中央＝神社本庁の懸念を看取できる。

⑵「〈宗教〉に利用される企業」であり、社会的に問題をはらんだ宗教集団が、企業を利用（悪用）する危険性がメディア報道によって喚起されている。

⑶「宗教関連商品に対する一般社会側からの規制」であり、利益追求のために企業が、宗教やスピリチュアル･ブームを意図的に悪用したり、もしくはブームに無自覚に乗ってしまったりすることでトラブルが発生している。

⑷「非宗教的な市民団体の宗教への〈関心〉」である。そこでは、一般企業における宗教に関わる活動が、市民団体の運動によって、それぞれの団体の目的のもとに問題化した事例がみられる。

（1）の事例に含まれるのは、1988年に受験のお守り「オクトパス」（「置くとパス」との語呂合わせ）について、「合格祈願・他力本願寺」などと銘打ったので、東西本願寺が抗議し、商品を回収した事例や、2002年にオリンパスが「他力本願から抜け出そう」というキャッチコピーを新聞広告に出し、やはり抗議を受けた例などである。

（2）の事例に含まれるのは、1999年に、毎日新聞社発行の『毎日ライフ』が、約8年間にわたり世界基督教統一神霊協会（統一教会）が霊感商法に用いていたとされる高麗人参茶の広告を全面掲載していたことに、全国霊感商法対策弁護士連絡会が公開質問状を送付した例などである。

（3）の事例に含まれるのは、2004年に大阪府のパチンコ機器メーカーが空海、聖徳太子など歴史上の人物35人を登録商標として特許庁に出願し却下された例や、2007年にフジテレビ系のテレビ番組「ＦＮＳ27時間テレビ」の「ハッピー筋斗雲」のコーナーで、スピリチュアルカウンセラーを自称する人物が、勝手に「霊視」をして、事実と異なる情報を放送したことがＢＰＯ（放送倫理・番組向上機構）によって、倫理違反であるとして、フジテレビに意見書を手渡した例などである。

（4）の事例に含まれるのは、2001年に市民団体が、福井県敦賀市にある高速増殖炉「もんじゅ」について、「文殊」という仏教語を用いていることを問題視し、改名を求めた例などである。

この４つの分類は多様な事例を整理するために提起された仮のものと考えることができる。分析的な視点を深めて類型化を行なおうとするなら、一定の指標を設定することが求められる。一つの指標としては、企業の側のスタンスが候補となる。企業が宗教文化にどの程度配慮をしているかである。ほとんど配慮していなかったために生じうる問題もあるし、ある程度配慮していても、予測の範囲を超えて発生した問題もありうる。

他方で個々の宗教のもつ特徴も指標の候補である。教義や戒律が明確で、それを守ることを重視する宗教もあれば、教義あるいは戒律らしきものはほとんどない宗教もある。教義や戒律が明確な場合は、その宗教に属さない人にも、それが関わる場面がでてくる。こうした指標をいくつか設定しながら、現実に生じている個々の問題を整理していくという作業を今後進めていくことが、当面の課題の一つである。

宗教に対する一般的な認識の欠如は、現代の日本社会に通底するものである。それは宗教

的な原則に従って生きようとしたり、戒律を大事に守って生活する人びとがいるんだということを経験する場が少ないことも一因である。またそうした人びとに対し、警戒心のようなものを抱く人がいるのも事実である。宗教よりは世俗的価値観、共同体の調和が優先されるべきであるという考えは、日本社会では多数派となる。

そのような傾向の社会において、企業関係者が宗教文化に配慮しない傾向が強いのは当然である[(6)]。政治家においてもそうで、宗教というものへの基本的認識が乏しい発言は枚挙に暇がない。最近の例で言えば、たとえば2009年の「小沢発言」がある。

2009年の11月10日に、当時の民主党の小沢一郎幹事長は、和歌山県高野町で全日本仏教会の会長と会談した後、その宗教観を述べた。その中でキリスト教を批判するような見解を示し、キリスト新聞などが、これを大きくとりあげた。小沢一郎は、キリスト教は「排他的で独善的な宗教」であると表現し、さらにこうしたキリスト教を背景とした欧米社会は行き詰まっているという趣旨のことを述べたという。イスラームについても、キリスト教よりはましだが、やはり排他的という見解を示したが、仏教に対しては、「人間としての生きざまや心の持ちようを原点から教えてくれる」と肯定的な見方を示したと報道されている。

日本キリスト教連合会は、翌11日付けで抗議文を送って、発言を撤回するように求めたが、小沢一郎は、根本的な宗教哲学と人生観が違うということを述べたのであるとして、撤回に応じなかった。

ここでの問題は、政権与党の幹事長が、世界に広がりをもつ宗教に対して、きわめて単純化した見解を示したということになる。つまり、キリスト教にしても、イスラームにしても、現実の信者たちのありようは、原理主義的傾向が強いものから、ゆるやかな信仰形態までさまざまである。同様のことは仏教にもあてはまる。

仮に企業のトップが、このような類のおおまかな発言をすれば、その企業が大きな批判を受ける可能性がある。国によってさまざまな展開をしている宗教を、キリスト教、イスラームといった、きわめて大きなくくりで特徴づけて批判するというような態度は、グローバルな企業にとっては、きわめてリスキーということになる。

### 3. 専門紙で報じられた事例

ここ10年ほどの宗教と企業に関する記事は、宗教専門紙にも若干見受けられる。宗教情報リサーチセンターでは宗教専門紙として、神道中心の『神社新報』、仏教中心の『仏教タイムス』、キリスト教中心の『キリスト新聞』『カトリック新聞』『クリスチャン新聞』、新宗教中心の『新宗教新聞』、そして宗教界の出来事を網羅的に扱う『中外日報』についての情報を収集している。これらの主たる記事内容も『ラーク便り』に紹介されている。

一般紙に掲載された記事と比べると、より特殊な問題に絞られている傾向がある。当然のことながら、それぞれの宗教にきわめて関係が深いと判断された事柄に集中している。

神社新報であると、お守りの商品化への危惧、映画「靖国」の製作手法への批判がいくつか見受けられる。『キリスト新聞』（2007年10月27日付）は、アメリカの大手小売チェーンのウォルマートが、「しゃべるイエス人形」を発売したことに、キリスト教関係者からクレームが出たことを報じている。『クリスチャン新聞』（2010年3月28日付）はインドのメガラヤ州でイエスが煙草を吸った絵を教科書に掲載した事件を報じている。

『新宗教新聞』（2008年1月25日付）は、スピリチュアル問題を報じている。『中外日報』

は宗教界全般の話題を扱っているが、仏教の占める比重がもっとも大きく、他力本願問題を報じている。これらについて少し説明を加えたい。

神社新報の記事からは、インターネットの普及にともない、神社の尊厳性が冒されるような事態が進行しているのではないかという危惧がうかがえる。「お守り」や「お札」が「グッズ」扱いになることの危惧と捉えてもいいだろう。社頭での授与品とされてきたものが、一般の商品と同様に扱われることを問題視している。ただ、これがお守りを「製造」している側が、どのような注意を払うべき事柄なのかと問い返すと、一般的な基準は見出しにくい。すでに東郷神社が「Z 旗キティ」のお守りを、あるいは神田明神が「ＩＴ情報安全守護」のお守りを販売している現状からすると、「神社の尊厳性」という表現があてはまるのは、どのような事例からかは、企業側からすると、非常に見分けにくいことになりそうである。

また李纓監督による映画「靖国」については、靖国参拝訴訟の原告の主張が大きく扱われていることや、取材方法が不適切であったこと、捏造が指摘される写真を多用しているなどの批判をしている。靖国神社が、李監督や配給会社などに質問と問題映像の削除等を求める通知書を送付したことを報じている。先に述べたように、映画をめぐるトラブルは数多いのであるが、この場合は、宗教文化の問題の他にイデオロギー的な問題も絡むので、より複雑な構図となっている。日本国憲法では、基本的に表現の自由が保障されているので、宗教文化というよりは、当事者への配慮といった範疇に含まれる事例かもしれない。

キリスト教関連の新聞は、イエス・キリストの扱いに関心が高い。神社の尊厳性の問題に似た面があるが、イエスという人物がパロディ化されることには、警戒が示される。もっともインドの事例は問題のイエスが喫煙し、ビールを飲んでいる絵が、インターネットに掲載されたものを利用したというずさんなやり方であったので、批判されても当然の出来事ではあった。（下図参照 (7)）

しかし、こうした宗教の創始者のパロディ化という点では、すでに中村光『聖☆おにいさん』という漫画が人気を博しているように、日本ではかなり進行している。この漫画は、ブッダとイエスが、現代社会に登場し、東京都立川のアパートの一室で「聖」（せい）という名字で一緒に暮らしているという設定で描かれたコメディである。2007 年から講談社の漫画雑誌『モーニング・ツー』で連載が始まり、単行本化されている。2009 年には、手塚治虫文化賞短編賞を受賞している。ユーモラスな内容であり、また歴史的イエス像、ブッダ像もある程度踏まえられている。現在の時点では、キリスト教界からも仏教界からもとくに強い批判の声はあがっていない。どこまでが限界かは、もっときわどいものが出現したときに、表現の自由の問題と絡みながら、論じられる可能性がある。

『新宗教新聞』で扱われたスピリチュアル問題は、2007 年 2 月に全国霊感商法対策弁護士連絡会が、スピリチュアル関連のテレビ番組が霊感商法被害やカルトへの入信の素地になっ

ているとして、日本民間放送連盟はじめテレビ各局へ番組の行き過ぎを是正するよう要望書を提出したことを扱っている。新宗教新聞は新日本宗教団体連合会（略称「新宗連」）の機関紙であり、新宗連では立正佼成会、妙智會教団、円応教などの新宗教が中心的な活動を展開している。新宗教自体が社会的に警戒感をもって報道されることが少なくないので、宗教がビジネス化する傾向には注意を払っている。したがって、宗教全体が批判的な報道をされる誘い水になりかねない「霊感商法」には、注意を向けていると考えられる。ひるがえって、企業側の視点に立つと、とりわけメディア関係者側に視聴率がとれるなら、無批判に番組を制作していいのかといった問題が突きつけられていることになる。

他力本願問題については、『中外日報』（2002 年 5 月 27 日付）が、オリンパス光学工業が朝日新聞など全国紙 4 紙で、「他力本願から抜け出そう」というキャッチコピーを用いデジタルカメラを宣伝したことに対し、浄土真宗が抗議したことを報じた。浄土真宗本願寺派は、真宗教義の要諦である他力本願の誤用であり、真宗教団の存在の否定につながる恐れがあるとしたのである。オリンパス光学側は慣用句として使用したが、勉強不足で配慮が足りなかったと回答した。そして、表現をあらため、コピー作成に関わった電通は、そうした事態にふたたび陥らないようにと、マニュアルを作成した[(8)]。同年には、ＮＨＫがドラマ「お江戸でござる」で他力本願を「他人任せ」の意味に誤用したとして、やはり浄土真宗が「以後注意を」と依頼文を送付したことを『中外日報』（2002 年 9 月 12 日付）が報じている。

『中外日報』（2008 年 1 月 17 日付）はまた、統一教会が実質的に主催しているサッカー大会問題を取り上げている。鮮文平和サッカー財団主催の国際サッカー大会ピースカップコリアが、スペインで開催される計画があることに対し、全国霊感商法対策弁護士連絡会は、日本サッカー協会やＪリーグ加盟各チームなどに参加をしないよう求める申し入れ書を送ったと報じている。また、2007 年 7 月に行われた大会には清水エスパルスが、同連絡会の参加中止要請にもかかわらず参加をした経緯があることにも触れている。

以上のように、宗教の各専門紙には、それぞれの宗教関係者がどのような内容の商業活動、ビジネス等に警戒を抱いているかがうかがえる。ただこうした事例が、たとえば企業側が宗教文化についての認識を深めようとした際に、どの程度参考になるかとなると、ストレートにはむすびつかない場合も多くあると言える。むしろ、問題の背景となっている事柄について考察を深めることが重要になる。神道は何を大切にしているか、仏教の場合、たとえば宗派ごとにもっとも重視しているのは、どのような教義か、といった視点である。最近の関連する記事の分析からは、日本国内の宗教に関する限り、宗教文化への理解不足が企業にとって大きなリスクをもたらすような状況にはないと見ていいだろう。やはりグローバル化がもたらしつつある問題に、より注意を向けなければいけないということになろう。

## むすび

企業の側から、宗教文化の理解を深めようとするときの理由を考えるとすると、これはリスク・センシティブ（risk sensitive）と言われる問題に含まれると考えるのが適切である。リスク・センシティブとは、「リスクに対する感受性」であり、簡単に言えば、企業活動にとってのリスクを予測し、できる限り回避しようとするとする姿勢をもつことである。このリスクの対象に何を考えるかであるが、今回の調査や最近の宗教記事の分析によって、企業が宗教文化をその対象に含めることはまだ一般的でないということが分かる。ただ、一

部の企業では、すでにそうしたことを視野に収め、さらにこれをCSR（Corporate Social Responsibility。企業の社会的責任履行）の問題とも関連付ける考え方も出てきている[(9)]。宗教文化に対する誤解や認識不足が不要な社会的トラブルをもたらしたとするなら、それは企業の社会的責任が問われることにもなるからである。

グローバル化が進行する時代における宗教文化と企業活動との関わりについては、イスラーム問題をはじめ、いっそう複雑な局面がもたらされると予測される。グローバル化時代は人、モノ、情報が多様なルートで展開する。つまり、クリスチャン、ムスリム、仏教徒、ヒンドゥー教徒、無宗教者などが多様な出会いをする。ある宗教的意図をもって作られたモノ、たとえば十字架、数珠、お守り、お札などが、もともとの宗教的コンテキストとは異なった社会に流通する機会も増える。情報の多様化は言うまでもない。

また商品も新たな開発がされる。コンピュータ時代、デジタル時代は、新しいハードウェアとともに、数多くのソフトウェアを生み出す。アニメのＤＶＤ、映画のＤＶＤ化が進む。これらには文化的なコンテンツが含まれる。つまり、宗教文化に関わる事柄はこれまでにない形態の中での議論にさらされることになっていくのである。

こうした時代に、製作者や販売者には、リスク・センシティブな発想を多少なりとも導入する必要性がましていると考えられる。なぜなら、人びとの娯楽に供したり、食の楽しみを増やしたり、といった前提であったのが、結果として文化的なトラブルの原因となったとしたら、それはきわめて不幸なことと言わざるを得ないからである。それが止むを得ない事情によって生じたものならともかく、宗教文化についての配慮がいくらかでもあったなら避けることができた場合には、それを繰り返さないような手立てを講じた方がいいということになる。

こうした発想からすると、宗教文化についての認識を深めることは、グローバル化が急速に進行し、情報化がほとんどの人が予測できない形で展開している現代社会において、欠かすべからざるものになってくる。企業関係者もこの点についての認識を深めざるを得なくなっていくと予測される。

宗教文化に絡んだ問題の背景には、企業の宗教文化への認識不足というだけでなく、一般の人もそのように理解し、認識しているという現実がある。つまり、企業の態度は、ある程度一般の人の宗教に対する認識のあり方を反映しているということである。したがって、企業の宗教文化に対する認識を論じる視点は、日本社会における宗教文化への認識を論じる視点と直接的に結びついている。そのような構図があるとすれば、大学における宗教文化教育のもつ意味は、いっそう重みをもっているということになる。

注

(1) 平成21年度特別推進研究助成金「インターネット時代における宗教情報リテラシーに関する研究」（研究代表者・井上順孝、研究分担者・黒﨑浩行、平藤喜久子、星野靖二、研究協力者・岩井洋、田島忠篤）

(2) とくに株式会社ディスコ社長の小坂文人氏には、貴重な助言を頂戴した。

(3) 井上順孝編『インターネット時代における宗教情報リテラシーに関する研究』國學院大學、2010年。

(4) 科学研究費補助金基盤研究（Ａ）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研

究代表者・星野英紀大正大学教授）による研究の一環として、2009 年度に発足した研究会。同科研のメンバーが中心になって開催している。

(5) 高橋典史・藤野陽平「企業活動と宗教をめぐるトラブルに関する研究序説―メディア報道の分析を中心に―」（井上順孝編、前掲書、所収）

(6) 2004 年の 9 月にトヨタ自動車が中国で「覇道」と表記していた四輪駆動車プラドを「普拉多」という表記に変えたというニュースがあった。プラドは、昨年九月から中国で製造が始まったが、「覇道」という漢字は、中国における日本企業の「横暴」を連想させるものであるという指摘があったようだ。トヨタ自動車は、謝罪広告を出し、「普拉多」に変えたということである。

トヨタはトヨタ財団をとおして、人類学や宗教学、社会学といった研究分野にも積極的な支援をしている企業である。その意味では異文化理解には注意を払っていないわけではないのである。むしろ異文化理解は口で言うほど簡単ではないと思い知らされる事件と言った方がいいかもしれない。

(7) この図に関しては、下記のウエェブサイトから引用した。

URL:http://www.google.com/imgres?imgurl=http://irregulartimes.com/wp-content/uploads/2008/07/jesusbeercigaretteimage.gif&imgrefurl=http://irregulartimes.com/index.php/archives/2008/07/15/christians-riot-over-offensive-images-in-india/&usg=__pA6dMBM8G04Xzl10SfFa9O2RmiI=&h=500&w=500&sz=134&hl=ja&start=1&zoom=1&um=1&itbs=1&tbnid=edaAuqheTZcdpM:&tbnh=130&tbnw=130&prev=/images%3Fq%3Djesus%2Bindia%2Bbeer%26um%3D1%26hl%3Dja%26tbs%3Disch:1

(8) 他力本願に関しては、1988 年にオクトパス問題が起こっている。これは大阪府のある業者が、「合格祈願・他力本願寺」と称してオクトパス（「置くとパス」との語呂合わせ）というお守りを販売したもの。東西本願寺が抗議して、商品が回収された。しかし、現在「他抜き本願」と称するお守りが売られている。

(9) 2010 年 1 月 24 日に國學院大學で開催されたシンポジウム「宗教文化教育に求められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて」における発題者の一人である日本ユニシスの多田氏は、日本ユニシス株式会社ＣＳＲ推進部長という立場から、企業にとってのＣＳＲという発想について説明がなされた。このＣＳＲという考えからすると、宗教文化への配慮という問題は、重要な課題の一つとなるものであると述べるとともに、一部の企業はすでにそうした認識をもっているとも指摘した。

# 圓佛教教徒の意識調査　―アンケート調査の分析を中心に―

李　和珍

## 1．はじめに

韓国の仏教系新宗教である圓佛教は、少太山（朴重彬、1891 ～ 1943、現在は「大宗師」と呼ばれる）によって 1916 年全羅北道益山市で開教された [(1)]。少太山の教えの中核は、「物質は開闢される、精神を開闢しよう」というものである。少太山は、植民地時代に貯蓄組合の設立による資金や干潟の干拓事業などにより得られた経済的な基盤をもとに、信心深い 9 人の弟子とともに宗教研究を始め、経典、各種の教書編纂などの精神的な基礎を作るとともに、「仏法研究会」という名で本格的な活動を開始した。1943 年 6 月 1 日に少太山は死去するが、教団ではこれを「涅槃」と表現している。その法統は弟子の鼎山（宋奎、1900 ～ 1962、現在は「宗師」と呼ばれる）に継承され [(2)]、45 年には教団名が「圓佛教」となった。圓佛教の信仰の対象は「法身佛一圓相」であり、「○」の象徴であらわされる。修行の際は、これを前に置く。基本経典は『圓佛教教典』（正典と大宗経 [(3)]）であり、教書は『圓佛教全書』（佛祖要経、礼典、鼎山宗師法語、圓佛教教史、圓佛教教憲、聖歌）と大山宗師法門集などがある。

圓佛教は新時代の新しい仏教、新しい宗教であると教団は説く。仏教に源を置くけれども、「法身佛一圓相」を信仰の対象と修行の手本とする独自の教理と信仰・意識体系を備えているとする。独立した教団であって、新しい宗教であるともしている。圓佛教の聖地（全羅北道益山市）の中央総部をはじめ、韓国国内に 15 教区 450 余ヵ所の教堂、国外には 4 教区 13 ヵ国 30 余ヵ所の教堂がある。アメリカ、日本、カナダ、ドイツ、南アフリカなどに教役者を派遣し、ニューヨークには圓光韓国学校、ハワイの国際訓練院などを設立して海外教徒の教育と訓練を行っている [(4)]。教化・教育・慈善が圓佛教の三大事業とされているが、教化は全国の教区と「教堂」と呼ばれる支部、国外の複数の教堂を中心に行われている。教育は、圓光思想研究院をはじめ、圓佛教大学院大学校（圓佛教教役者養成）、圓光大学校、圓光保健専門大学、円光中・高校などにおいて行なわれている。慈善事業としては、総合社会福祉館、総合病院、漢方病院、孤児院などの医療事業、出版、文化事業も展開されている。

本稿では、2008 年末から 2009 年初にかけて実施した圓佛教への信者に対するアンケート調査の結果を分析するが、これは妙智會教団と圓佛教という日韓の新宗教の比較研究の一部である。筆者は 2007 年に日本の仏教系新宗教である妙智會教団の会員を対象にアンケート調査を実施し、情報化時代における会員の対応に世代間の意識差はあるかどうかに焦点をあててまとめた [(5)]。今回のアンケートは、妙智會教団との比較を行なうため、ほぼ同様の質問項目で圓佛教教徒を対象に実施した。すでにアンケート結果の一部は、妙智會教団と圓佛教の先祖祭祀に関する考えや捉え方に世代間の相違がみられるかを比較してまとめているが [(6)]、本稿では、圓佛教信者へのアンケートの全体についてまとめる。

圓佛教に対するアンケートは、妙智會教団同様、教団への依頼という方法（託送法）によっ

て実施した。具体的には韓国在住の圓佛教関係者に依頼し、2008 年末から 2009 年初にかけて韓国内の法会や教団の行事の際に配布・回収する方法で行った。すべて回収されたのちに送付してもらったので、回収までかなりの時間を要したが、約 2,000 部を配布したアンケートのうち、1,252 部の有効回答を得ることができた。

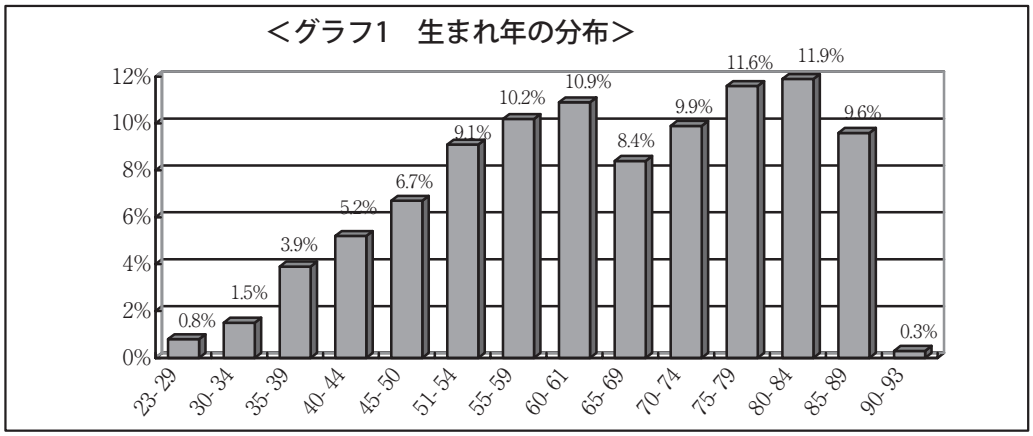
質問項目は全部で 21 項目で、問 1 ～ 6 は回答者の基本属性である生まれ年、性別、生まれ地域、入会動機とその時期、教徒か役の有無に関する質問である。問 7 ～ 11 は信仰生活の実践度、特に読経の頻度、教団行事への参加度などである。問 12 ～ 14 は教団や教役者に対する信頼度と布教活動に関する項目である。問 15 ～ 18 は、教徒同士の連絡手段や教団からの指示の受け取り手段などの情報伝達手段、またインターネットと教団のホームページに対する認知度について質問している。問 19 ～ 21 は教団行事の来賓に対する考え、教団の社会活動に対する認識、海外布教活動に関する考えなどの質問である。

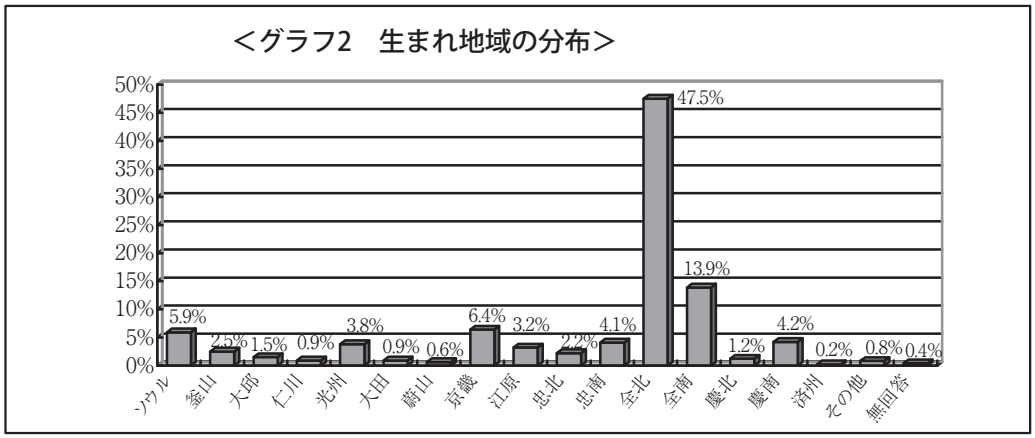
本稿では、アンケート調査の集計結果の概要を示すとともに、とくに現在の情報化時代における信者の意識の世代差について焦点をあてる。また一部の回答結果については、妙智會教団との比較を行う。

## 2．調査結果の概要

### (1) 基本的属性の概要―男女比率、年齢分布、生まれ地

まずアンケートの回答者の基本的属性の概要を述べる。性別は男性が 49.3%、女性が 50.5％で（無回答 0.2%）、ほぼ男女半々であった。年齢分布はグラフ 1 に示した。5 年刻みとしたが、回答時の年齢では、おおよそ 1930 ～ 34 年生まれが 70 歳代後半、35 ～ 39 年生れが 70 歳代前半と推定されることになる。1920 年代生まれ（ほぼ 80 歳代）と 1990 年代生まれ（20 歳未満）の人はきわめて少なく、20 代、30 代、50 代が比較的多いと考えていい。生まれ地域別にみた結果は、グラフ 2 のようになった。韓国南西部にあたる全羅北道が 47.5% で半数近い割合を占めている。全羅北道の中でも益山市（4 割近く）と全州市（2 割）の割合が高いという結果だった。この結果はアンケートの配布地域に関わると思われる。益山市以外の他地方教堂や行事の際にも配布はしたが、益山市内の教堂、聖地での行事、訓練、円光大学校での配布・回収が大数を占めるため、偏った結果になったと思われる。なお益山市は圓佛教の発祥地であるから、その意味でも益山市近辺からの回答が多かったのは自然である。






（2）信仰生活の実践度と教団に関する考え

次に、圓佛教教徒の信仰生活の実践度関連項目と、教団（行事・教役者）に関する項目について、その結果の概要を示していきたい。

まず一つ目は教徒の信仰生活関連の質問項目であるが、全４問である。圓佛教教徒には信仰・修行生活の中で守るべき四つの義務があるが、それは「朝夕心告」、「法会出席」、「報恩献供」、「入教淵源」で「四種義務」と表現される[(7)]。毎日の実践項目である朝夕心告や毎週の法会出席の時には読経と座禅をする。座禅をくんで心を空にして一圓相誓願文をはじめ、霊呪、清浄呪、聖呪文、般若心経などの読経をする。

このような日常の信仰実践がどの程度行なわれているかを調べるために「読経と座禅はどの程度の頻度で行っていますか」（問７）という質問をした。回答結果は、「毎日」が 43.1％、「週１～２」が 35.3％、「月２～３」15.1％、「やらない」5.5％、無回答が１％となった。毎日と週１～２を合わせると８割近い結果で、回答者の約８割は少なくとも週１～２日以上はこれを実践していることが分かる。

この読経と座禅の目的は何であるのかを調べるため、「あなたが読経と座禅をする目的は何ですか。一つだけ選んでください」（問８）と質問した。結果をみると、「先祖供養」7.0％、「自分の幸せのため」27.7％、「家族の幸せのため」27.0％、「社会の平穏」16.4％、「世界平和のため」15.3％、「その他」5.1％、無回答 1.5％という結果であった。信仰の目的は自分や家族のためが６割近くの結果で、現世利益的な考えが強いとも言える。ただ、社会や世界平和のためを合わせて３割以上という結果は、圓佛教の開教動機の戦争と貧困、無知と病気から開放された楽園世界のこの世に建設するためとする考えが影響していると思われる。

実践度に関する質問は、法会出席関連の「毎週の定例法会や年例法会などには参加しますか」（問 12）という内容である。回答の結果は「必ず参加する」46.2％、「できるだけ参加する」42.3％、「たまに参加する」10.5％、「参加しない」0.7％、無回答 0.3％となった。必ず参加する人が半数近い。

教徒がどれだけ布教活動に関わっているかを調べるために、「圓佛教の教えを人に勧めたことがありますか」（問 13）という質問をした。その結果は「よくある」25.6％、「たまにある」54.7％、「あまりない」18.4％、「進めたことない」1.1％、その他 0.2％となった。約３割近くが積極的であり、「たまにある」を合わせると、約８割が布教活動の経験をしているこ

とになる。これは四種義務の一つである「入教淵源」の義務と関わっている。「9 人の淵源を作る実践運動」が教化 3 大運動の一つとしてあげられているので、教徒たちには、布教は教えの上からも教団から義務づけられていることになるからである。

二つ目は圓佛教教徒の教団に対する考え、活動・方針などについての意見に関わる質問で、全 6 問である。まず、「あなたに悩みことがあるときに一番相談しやすいのは誰ですか。一つだけ選んでください」(問 12) と質問した。その結果は＜表 1 ＞に示すとおりである。なお、「その他」とした 46 人にのうち 19 人が具体的に記しているが、それをみると、13 人が「先生」と記入していてもっとも多く、あとは「先輩」、「妻」、「祈祷」、「一圓相」などの回答が少数あった。

| ＜表 1 ＞ | 教堂の教務 | 入教淵源 | 他の教徒 | 親(家族) | 友達 | その他 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 41.9% | 20% | 4.8% | 12.4% | 16.8% | 3.7% | 0.4% |

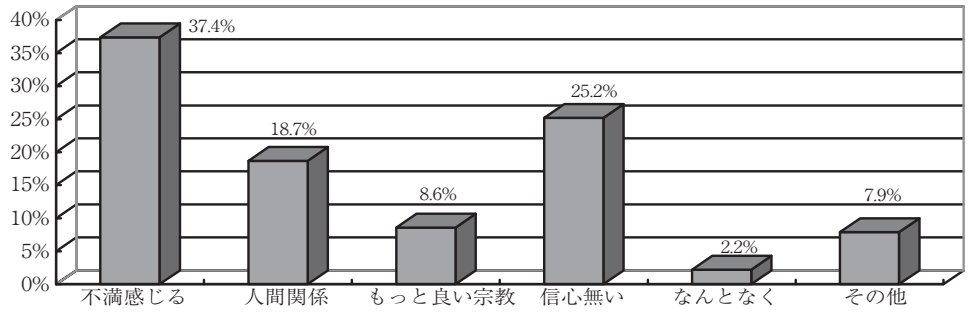
回答者の 4 割以上が教務に相談するという集計結果であったが、圓佛教の日常の集会や活動は教堂を中心に行なわれていることので、教堂を運営して教育を担当している教務に対する信頼度が高い結果が示されていると考えられる。この結果は、妙智會教団のアンケート調査の集計結果＜表 2 ＞と比べてみると、かなり似た傾向であることが分かる。

| ＜表 2＞ | 支部長 | 導きの親 | 他の信者 | 親 | 友達 | その他 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 31.3% | 13.3% | 5.6% | 12.6% | 13.6% | 16.9% | 6.7% |

圓佛教の教堂と教務は、それぞれ妙智會の支部と支部長に相当すると考えていいので、教務と支部長の位置づけと役割は、似たところが多い。筆者が参与観察した圓佛教のいくつかの教堂及び妙智會教団の支部でも、両者は教団側からの指示伝達や教理の教育、信者の管理といった役割を果しているのは明らかであった。

次は、教団に疑問を感じたり、信仰心に揺らぎを感じたことがあったかを知るために、「圓佛教をやめたいと思ったことがありますか」(問 14) という質問を設けた。「はい」11.4%、「いいえ」87.9%、無回答 0.7%の結果で、やめたいと思ったことのある教徒は少数であった。この質問に「はい」と答えた人には、やめたい理由を聞いた（複数回答)。その結果はグラフ 3 となったが、「圓佛教に不満を感じたから」が 37.4% となり、一番高い割合を示している。

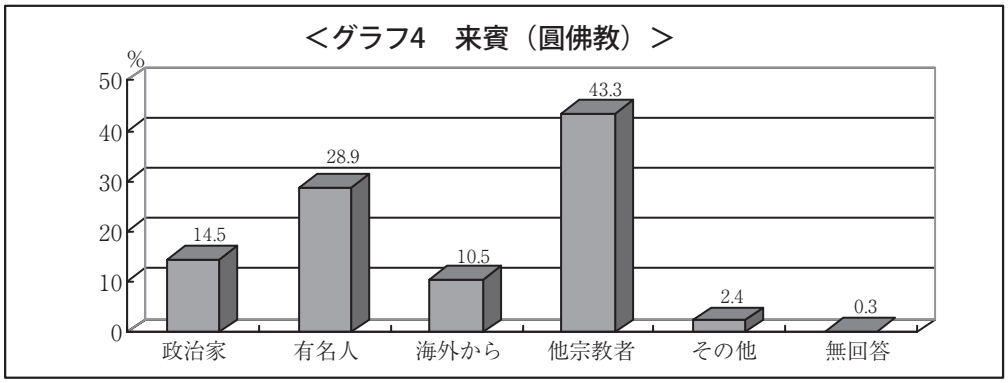
＜グラフ3　圓佛教をやめたい理由＞



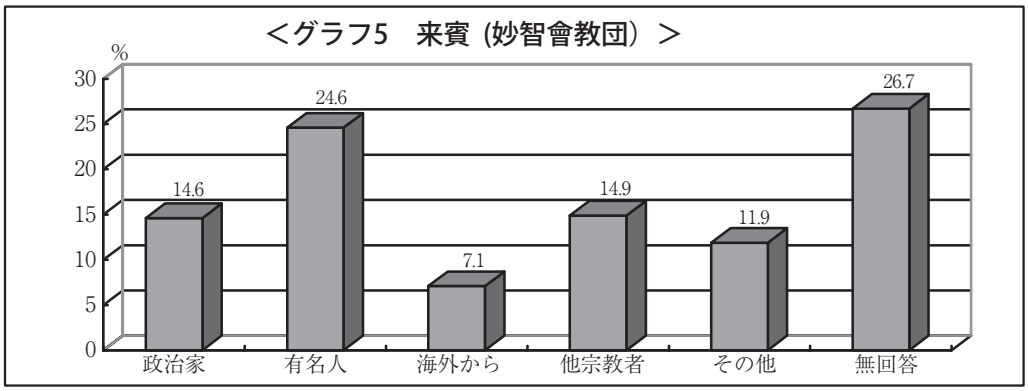
次に、教団の行事への参加度を調べるため、「総部や教区の行事などには参加しますか」（問11）と質問した。「必ず参加」26.1％、「できるだけ参加」43.8％、「たまに参加」22.6％、「参加しない」7.2％、無回答 0.2％という結果であった。「できるだけ参加」を合わせると約 7 割近くが高い参加度ということになる結果である。教団行事には積極的に参加する傾向であるが、圓佛教の社会奉仕活動についての質問「圓佛教が推進している社会奉仕活動（恩作る運動、奉公会、女性会）などについて一つだけ選んでください」（問 20）に対しては、半数以上は活動をしていないし、2 割以上が詳しくは知らないという結果であった（＜表 3 ＞参照）。法会や教団で行われている行事については積極的に参加するが、社会活動に関しては積極性が落ちる傾向が見てとれる。

| ＜表3＞ | |
|---|---|
| 知っていて、活動にも積極的参加 | 23.4% |
| 知っているが、あまり活動には参加しない | 55.4% |
| 聞いたことはあるが、詳しくは知らない | 20.5% |
| 知らないし、聞いたこともない | 0.5% |
| 無回答 | 0.2% |
| 合計 | 100.0% |

教団のさまざまな行事には来賓が招待されるが、教徒はそれについてどのような考えを持っているのかを調べるために「教団行事に来てほしいと思う来賓は次のうち一つだけ選んでください」（問 19）と質問し、その結果は、次のグラフ 4 のようになった。




来賓としては他宗教者が来てほしいという回答が 43.3％ともっとも多く、次に多いのは有名人で 28.9％である。他宗教の人が来て欲しいというのは、他宗教に関心を持っていて、それについて知りたいという考え、あるいは、他宗教の人に自分たちの教えを知ってもらいたいというような考えがあると推測されるが、それについては詳しく聞いていないので分からない。「その他」として具体的に述べられた意見（30 のうち 9 回答）としては、「教団の偉い人」、「社会の先覚者」、「行事に合う来賓」、「社会の弱者」、「脱北者」、「障害者」、「わからない」などがあった。なお、妙智會教団にも同じ質問をしたのだが、その結果はグラフ 5 に示すとおりである。




妙智會教団の会員は有名人が来賓として来てほしい割合が一番高く、他宗教者と政治家がほぼ同率の結果であった。その他の意見（297 のうち 229 回答）の半数以上（123）が来賓は要らない、来てほしくないという意見で、残りは有名人（歌手、作家、音楽家など）、政治家、宗教者（お坊さん）、教団関係者などの意見が同率の結果を示している。妙智會の会員はその他の意見にも有名人、政治家と答えているので有名人と政治家、他宗教者が来賓として好まれる存在であることが分かる。しかし、無回答 26.7％を無関心だと考えるのであれば、その他の半数 6％弱の来てほしくないという結果と合わせると会員の 3 割以上が来賓に関して、とくに積極的な意見は持っていないと考えられる。圓佛教では要らないという意見は無かったので、来賓に関しては、妙智會教団よりは積極的な意見を持っていると言える。

次に教団の国際化に関する質問の結果をみてみる。圓佛教は海外にも多くの教堂があり、海外布教にも励んでいるが、「圓佛教は海外に向けての活動をしているが、海外布教についてどう思いますか。一つだけ選んでください」（問 21）と質問した。「海外にも多くの教堂ができてほしい」72.9％、「日本などアジアの近い国に教堂ができてほしい」24.9％、「海外支部は特に要らないと思う」1.8％、無回答 0.4％の結果となった。圓佛教教徒の海外布教に関する意見は積極的な態度であるとみなせる。

## 3．情報化時代への対応

### (1) 情報ツールの利用状況

韓国放送通信委員会と韓国インターネット振興院が実施した 2009 年インターネット利用実態調査の結果によると、韓国のインターネット利用率は、2009 年 5 月の時点で満 3 歳以上の人口のインターネット利用率が 77.2％（利用者数 3,658 万人）で前年度より 0.7％増加しているという。この調査は 2000 年から毎年行われており、毎年利用率は増加している結果である [(8)]。このように韓国内のインターネット利用率は増加傾向にあり、情報化は急速に進行したことがわかる。

圓佛教の教団ホームページには様々なコンテンツや教団関連サイトへの連結が充実しており、教団歴史、教団組織、教理内容、公知事項などの閲覧ができ、教団関連機関・教堂ごとの Web サイトもあって教団機関へのアクセスや教堂別の情報収集や教徒同士の情報伝達、交換が可能になっている [(9)]。これを踏まえて、今回のアンケートからは情報化時代における圓佛教教徒の対応、すなわち、圓佛教教徒のインターネット利用度、教団公式ホームページ

に対する教徒の認識および利用度、希望事項など、また教徒同士の連絡、情報交換の手段などを質問した4つの項目の結果をみてみる。

まず、圓佛教教徒のインターネット利用方法についてであるが、「あなたのインターネット利用方法は次のうちどれですか（複数回答）」（問17）と質問し、「自分のホームページを持っている」、「自分のブログを持っている」、「携帯電話でインターネットを利用する」、「コンピュータでインターネットを利用する」などの回答の選択肢を用意した。「利用しない」「無回答」がコンピュータを利用していない人たちとみなすと、なんらかの形でインターネットを利用している人は87.7％となり、9割近くがインターネットを利用していることになる。（＜表4＞参照）。

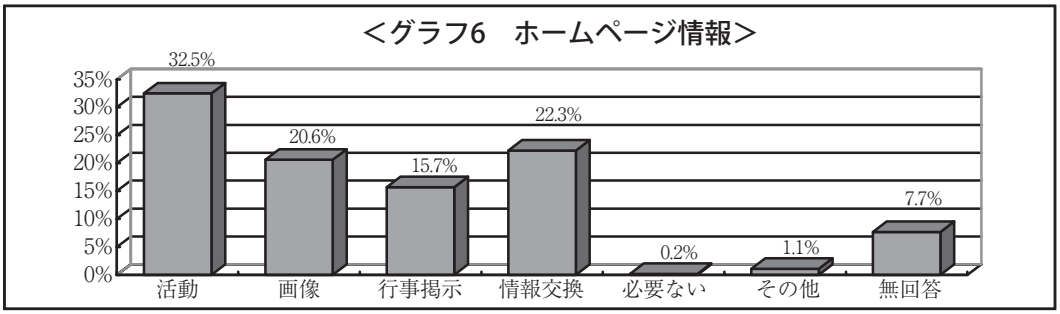
さらに、インターネットを利用している人については、どのようなホームページに関心があるのかについてさらに質問したが、その結果は＜表5＞に示すとおりである。これをみると、キリスト教系ホームページが63.3％で、もっとも高い関心が示されている。圓佛教は仏教系の教団であるが、他宗教への関心としては、キリスト教系に対する関心が高いという結果になった。

| ＜表4＞ | | ＜表5＞ | |
|---|---|---|---|
| 自分のＨＰ | 8.3% | キリスト教系 | 63.3% |
| 自分のブログ | 13.0% | 仏教系 | 16.1% |
| 携帯電話 | 2.4% | 新宗教 | 4.0% |
| コンピュータ | 78.7% | 占い | 3.7% |
| 利用しない | 12.1% | 関心ない | 9.9% |
| 無回答 | 0.2% | 無回答 | 12.9% |
| 合計 | 114.8% | 合計 | 109.9% |

次は「インターネット上に圓佛教のホームページがあることを知っていますか」（問18）という問いに対して「はい」88.1％、「いいえ」11.7％、無回答0.2％となった。この結果を、妙智會教団の集計結果と比較してみると、妙智會教団は「はい」38.6％、「いいえ」38.7％、無回答22.7％であったので、圓佛教の方がホームページについての関心は高いことが分かる。妙智會教団は高齢者の会員からの回答が多かったことが、こうした結果になった大きな理由の一つと考えるべきである。

問18の質問に「はい」と答えた人に、サブクエスチョンを2つ用意した。①「圓佛教ホームページについてどう思いますか」と②「圓佛教ホームページに求める情報は次のうちどれですか（複数選択可）」である。①の結果は、「十分」が40.9％、「まあまあ」38.7％、「不十分」8.9％、無回答11.5％となった。教団ホームページに対する満足度は「十分」と「まあまあ」を合わせると8割近くとなった。②の教団ホームページに求める情報については、「教団の紹介や活動内容をもっと充実にしてほしい」、「総部の行事様子を動画で掲載してほしい」、「教団の行事やお知らせなどを詳しく記載してほしい」、「教堂別やウォンマウル別の情報交換が可能な場を増えてほしい」、「ホームページは必要ないと思う」、「その他意見」という回答の選択肢を用意したが、その結果はグラフ6のとおりである。活動教団の行事や活動についてもっと詳しくホームページから閲覧できるようにしてほしいという回答が一番多く、その次が情報交換の場がほしいという回答であった。

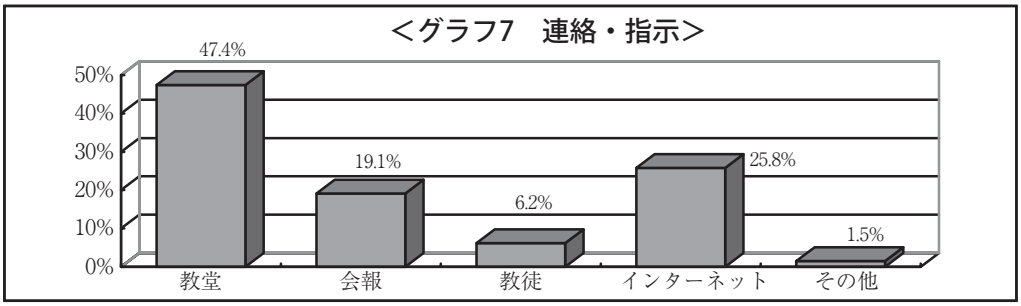
圓佛教ホームページにはウォンマウル（圓村）という教堂ごとに作成されたコミュニティサイトがある。このサイトでは、教堂の活動や動向などの紹介がされており、教徒同志の連絡網としての機能をもっている。自分の所属する教堂のウォンマルはむろん、他教堂のウォンマウルにもメンバーとして加入することができる[10]。ウォンマウルサイトのトップには「新規マウル」や加入者数が多い人気のウォンマウルが「マウル TOP」として一目でわかるようになっている。教徒たちにとって利用しやすく、かなり興味を引くような作りになっている。今回のアンケートではウォンマウルの利用度については質問していないため、どれくらいの頻度で利用されるかまでは分らないが、情報交換の場として有用に感じられていることはうかがえる。




次に、教徒同志の連絡手段についてであるが、これは「教徒同士の連絡手段で最も頻繁に使うのを一つだけ選んでください」（問 15）と質問した。その結果（<表 6 >参照）をみると、携帯電話を利用するという回答が 5 割以上で、固定電話を含めると 7 割以上が電話を利用している。インターネット利用率が高く、電話メールでの連絡もかなりの割合を占めると予想したが、直接会うという回答が電子メールでの連絡を上回るという結果になった。

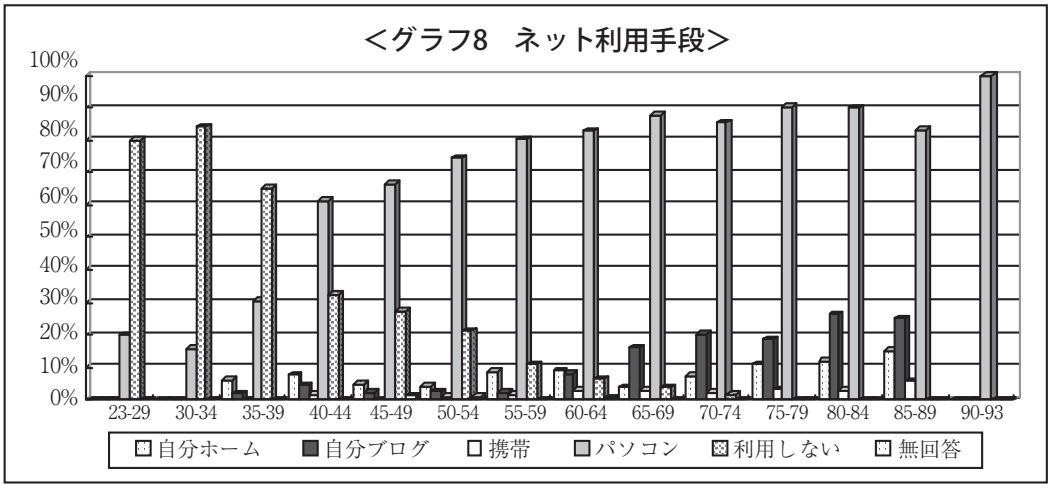
| <表 6> | 会う | 固定電話 | 携帯電話 | 電子メール | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 19.6 | 17.2% | 54.5% | 8.6% | 0.1% |

教徒同志には電話で連絡する場合が多いが、次は「教団総部からの連絡・指示の内容をどのように受け取っていますか」（問 16）と聞いたところ、「教堂の法会に参加して聞く」、「「円光新聞」などで読む」、「他の教徒に連絡して聞く」、「インターネットサイトで見る」、「その他」の結果がグラフ 7 となった。毎週の法会に参加して様々な情報を受け取ることが分かる結果であった。法会に参加できない場合はインターネットや会報などで情報を得ているという結果であった。

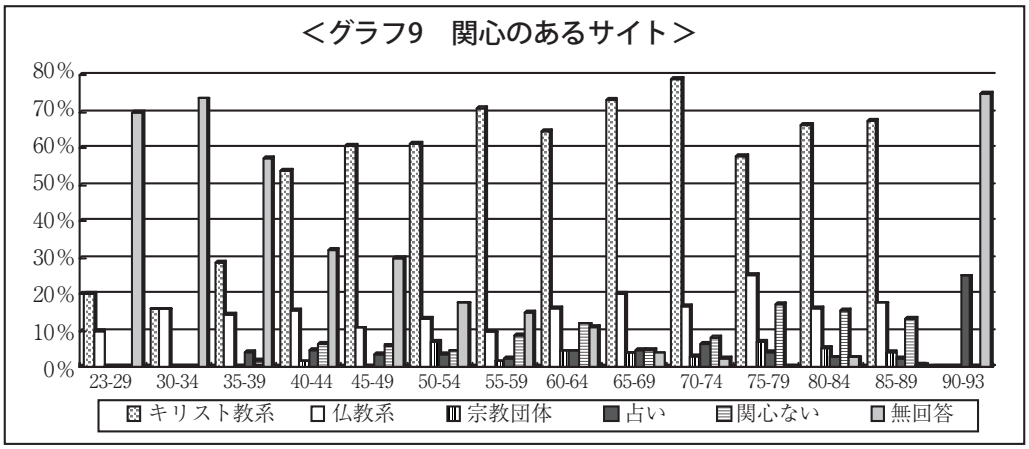


(2) 世代別による差

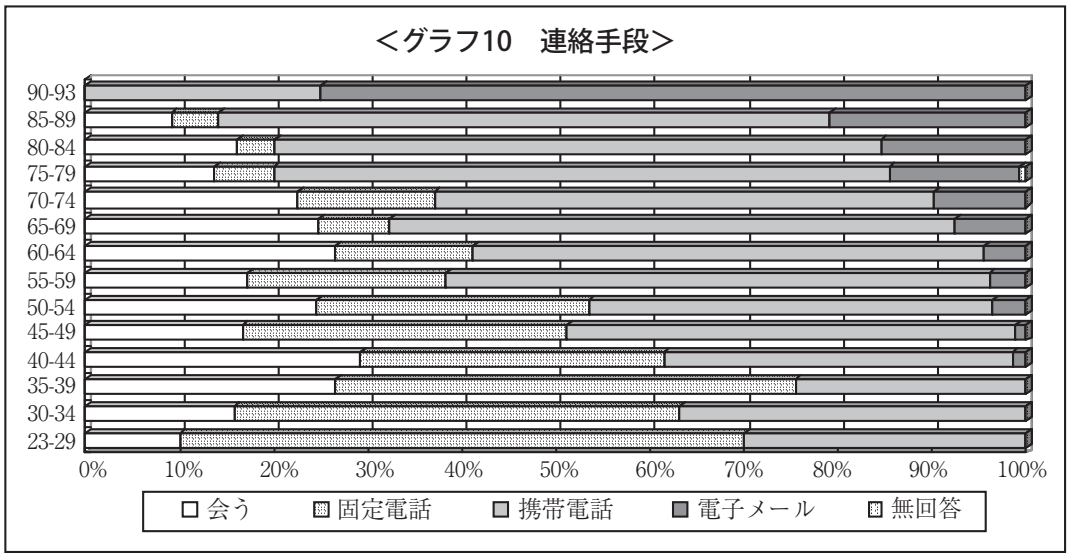
情報化における対応に関する質問の結果についてみてきたが、世代別に差はあるのだろうか。前述した2009年インターネット利用実態調査からは、毎年インターネット利用率が増加していてその年齢別の利用率を見ると、3～9歳 85.4%、10代 99.9%、20代 99.7%、30代 8.8%、40代 84.3%、50代 52.3%、60代以上 20.1%であった。40代以前の若い世代の利用率は極めて高く、60代になると2割程度という結果である。圓佛教教徒のインターネット利用方法に対する質問によって、インターネット利用度がおおよそわかるが、グラフ8のようにその世代別の差は高齢になるほど、利用しないという回答の割合が高くなっている。23～29年生まれの人が30～34年生まれの人よりパソコン利用率が若干高いのは面白い結果である。一般社会の傾向と同様に世代間で明らかな差が見られるが、10代はほとんどがパソコンでインターネットを利用している特徴がみて分かる。

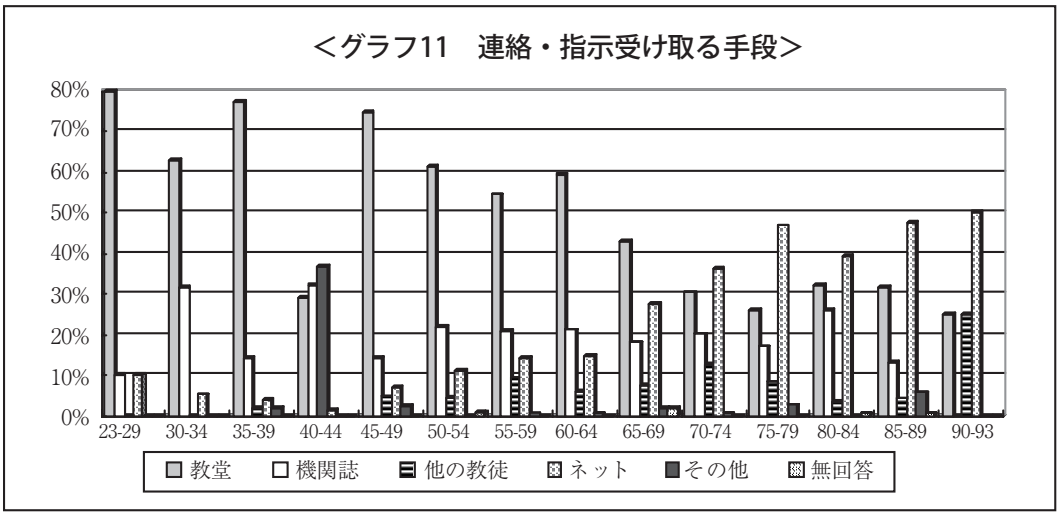



インターネットを利用している人の中で、関心のあるサイトを問う質問における世代差はグラフ9のように大体キリスト教系のサイトに関心を示す割合が高くなっているが、高齢者は無回答の回答が多く、90年～93年生まれの10代は8割近く無回答であるが、2割以上が占いに関心があるという特徴がみられる。

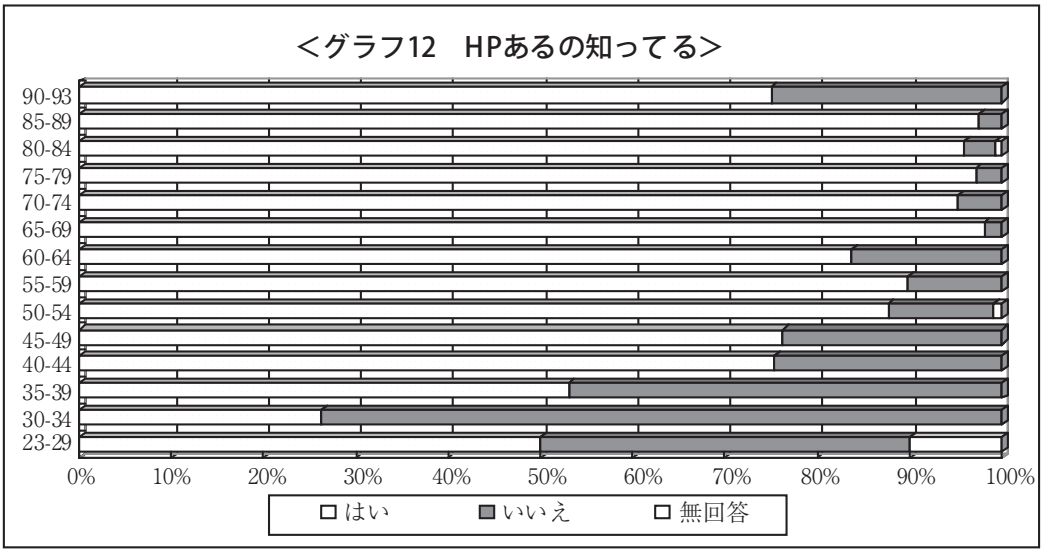


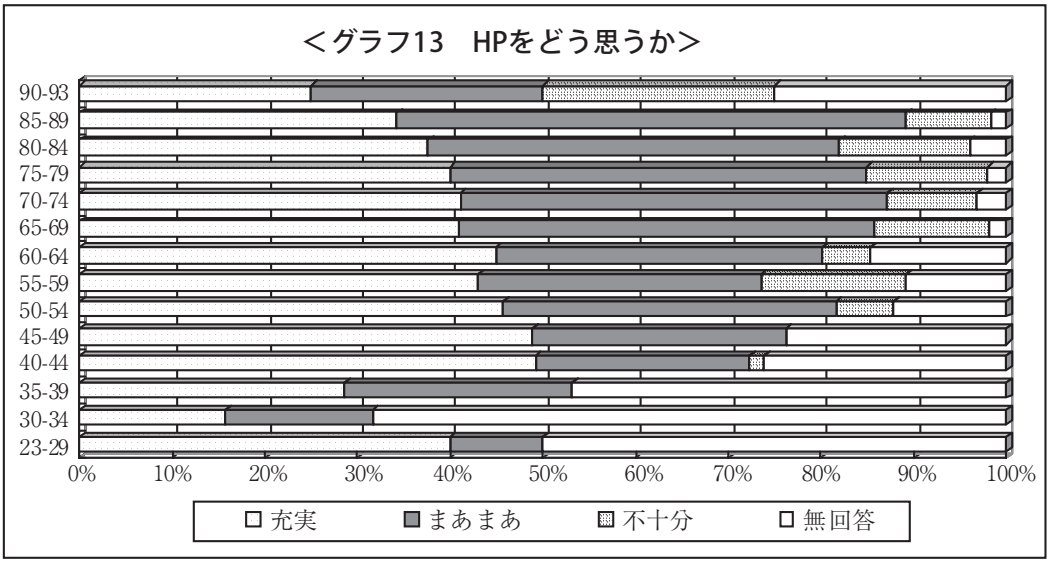
教徒同志の連絡手段における世代差は、以下のグラフ 10 のように直接会うことに関しては世代の差が大きいとは言えないが、固定電話に利用率は高齢者が多く、携帯電話は若いほど多くなる。10 代は携帯が 2 割以上、それ以外は電子メールの利用が占めている。教団からの連絡や指示を受け取る手段においては、グラフ 11 のようになった。教堂の法会に参加して受け取る場合が年齢の高くなるほど高くなる傾向を示しているが、40 ～ 44 年生まれの人は教堂が 29.2%、機関誌が 32.3%、他の教徒からが 36.9%の結果で他の教徒から聞くという割合が高い結果となっている。10 代は教堂 25%、他の教徒 25%、ネットが 50%と、インターネットを利用して連絡や情報交換をしていることが目立つ結果となった。



インターネット上に教団ホームページがあることを知っているかの質問に 88.1％が「はい」と答えたが、世代間の差はあるのだろうか。グラフ 12 から分かるように高齢になるほど、知らない割合が高くなっている。ただし、ネット利用手段におけるパソコン利用率（グラフ８）の場合と同様、ホームページの存在を知っているのも、23 ～ 29 年生まれの人が 30 ～ 34 年生まれの人より高い割合を示す結果となった。ホームページをどう思うかに対する意見の結果はグラフ 13 に示したが、無回答が高齢者ほど高くなる傾向にある。



## ４．おわりに

以上の圓佛教教徒の意識調査のアンケート結果に関して、信仰生活と情報化時代における対応という二つの面についてまとめておきたい。まず、信仰生活について、毎日の信仰生活の実践度、教団行事への参加度、布教活動の関係をみておきたい。回答者たちは個人の信仰生活や教団の宗教活動に対してはかなり積極的に関わっていることが分ったが、これに対し、教団の社会活動に対する認識や社会的活動に対しては、いくぶん消極的である。また教堂の教務に対する信頼度は高く、教堂が教徒たちの日常的活動の要となっていることが分かる。圓佛教自体は、社会的活動、社会貢献を前面に掲げる教団であるが、教徒たちは、それをある程度は共有しているものの、主として個人の信仰生活のよりどころとして関わっている場合が大半であると言える。

情報時代への対応に関しては、教徒同志の連絡手段としては固定電話や携帯電話の利用度が高く、他方、教団からの連絡・指示は教堂で知ること、受けることが多いという興味深い結果となった。インターネットの利用度自体は高く、教団ホームページに対する認識、利用度も高い割合を示している。つまり、インターネットを通しての情報入手には積極的であるが、実際の信仰生活を営んでいく際には、教堂で実際に顔を合わせる中での指導が依然としてもっとも重要なものとして認識されていることが確認できた。

世代差の比較の結果からは、高齢者ほどインターネットの利用度は低くなり、連絡手段も固定電話になっており、他方、若い世代は携帯電話の利用度と電子メールの利用度が高くなっている。これは日本同様当然の結果であろう。ただ注目したいのは、若い世代では、教団からの連絡・指示もネットで知る割合が高くなっていることである。日本や韓国の新宗教教団においては、実際に会って教えを受けたり、指示を受けたりすることが、一般的にもっとも重要とされているが、その基本的な情報伝達の手段にも少しずつ変化が生じてきているということである。

今回のアンケート結果からは、圓佛教教団の情報化への対応の一端を知ることができた。その対応は妙智會に比べると比較的積極的であり、韓国の社会全体の動向とほぼ呼応するような展開であると言えそうである。特にウォンマウルのコミュニティーに対する加入・活用は、新宗教教団と情報時代の関係を探る上で、非常に興味深いので、これに関してはさらに調査を重ねて、利用の実態を詳しく調べてみたい。

＜参考文献＞


・圓佛教中央本部『（日本語版）圓佛教経典〈正典・大宗経〉』、1975 年。

・教化訓練部『圓佛教はどのような宗教なのか（원불교는 어떠한 종교인가）』（圓佛教入門書１（원불교입문서 1））、教化訓練部、2002 年。

・韓国放送通信委員会･韓国インターネット振興院『2009 年インターネット利用実態調査』、韓国インターネット振興院、2009 年 11 月。

・李和珍「情報化時代における妙智會会員の意識―会員へのアンケート調査の分析を中心に―①、②」『国際宗教研究所ニュースレター』第 56 号、2007 年 10 月、第 57 号、2008 年 1 月。

・李和珍「新宗教の先祖祭祀の日韓比較―妙智會教団と圓佛教の事例を中心に―」『国学院大学研究開発推進機構紀要』第 2 号、2010 年 3 月。

注

(1) 開教の動機として明言されているのは、宗教の信仰と道徳の訓練で衰退していく人間の精神を回復させ、現実のすべての苦痛、すなわち戦争と貧富、無知、病気などから開放された楽園世界を建設することである。『圓佛教はいかなる宗教なのか（원불교는 어떠한 종교인가)』（圓佛教入門書 1 （원불교입문서 1))、教化訓練部、2002 年。

(2) 3 代目が大山(金大擧、1914 ～ 1998)宗師、現在は左山(李廣淨、1936 ～ )宗法師が務めている。

(3) 正典は、圓佛教教理の基本綱領で少太山が著述したもの。大宗経は少太山の一代言行録である。

(4) 圓佛教ホームページの「今日の圓佛教」。
http://www.won.or.kr/won-annae/info_main5.htm

(5)「情報化時代における妙智會会員の意識―会員へのアンケート調査の分析を中心に―①、②」『国際宗教研究所ニュースレター』第 56 号、2007 年 10 月、第 57 号、2008 年 1 月。

(6)「新宗教の先祖祭祀の日韓比較―妙智會教団と圓佛教の事例を中心に―」『国学院大学研究開発推進機構紀要』第 2 号、2010 年 3 月。

(7) 朝夕心告（信仰義務）は、朝夕の一定の時間にすべての仏と先祖、親に挨拶し、お願いを告げ、感謝と懺悔の祈りをする信仰行為である。法身仏の前、木魚の音がなくてもどこでも 1 ～ 3 分間の黙想でも毎日やることが大切とされる。法会出席（修行義務）が、各種の法会への出席に真心を込め、教団の法規と訓練法、教堂来往時の注意事項などをまもり、家庭・社会の法規法道をまもっていくことになる。教徒たちとの縁が篤くなり、法の真理がわかり、知恵のある正しい生き方へと導かれるからである。報恩献供（奉供義務）は、すべての恩に感謝し、献供することで、浪費を避けて節約し、物や金銭を仏前に捧げる。入教淵源（教化義務）は、圓佛教の入教への導き、永生への道を開いて済度することで一番大きい福となる。少太山が 9 人の弟子をもったことに基づいて、9 人以上の入教淵源を作り、出家淵源、成仏淵源までにいたることを目指す。

(8) 2000 年 44.7 %、2001 年 56.6 %、2002 年 59.4 %、2003 年 65.5 %、2004 年 70.2 %、2005 年 72.8%、2006 年 74.1%、2007 年 75.5%、2008 年 76.5%である。利用対象は、2000 ～ 2001 年は満 7 歳以上人口、2002 ～ 2005 年は満 8 歳以上人口、2006 年から満 3 歳以上人口に拡大したもの。2004 年調査からインターネット利用に移動電話無線インターネットを含み、利用定義は「月平均 1 回以上の利用者」から「最近一ヶ月以内インターネット利用者」に拡大して実施した。『2009 年インターネット利用実態調査』韓国放送通信委員会･韓国インターネット振興院、2009 年 11 月、p.21 参照。

(9) 宗教 WEB 紹介「韓国新宗教のウェブによる情報発信―圓仏教を中心に―」『ラーク便り』第 39 号、2008 年 8 月。

(10) 圓佛教ホームページのトップにはウェブ会員登録の欄がある。「一般会員」「教徒会員」「専務出身会員」「外国人教徒会員」の 4 つの種類があり、それによって利用できるサービスが異なってくる。自分で決めた ID とパスワードを入力すると圓佛教ウェブサイトの会員になり、さらにウォンマウルの会員としての登録もできる。しかし、別のウォンマウルを閲覧したい時は、再び登録が必要である。

附記

　このアンケート調査は、圓光大学校の梁銀容教授のご紹介によって可能となり、実際の調査にあたっては李イウォン教務に配布・回収を含め、多大なご協力をいただいた。お二方と圓佛教の関係者各位にお礼を申し上げたい。

# スタッフ紹介

* 氏名、現職、専門分野、担当プロジェクト、および2009年度の研究業績について紹介しています。今年度新任のスタッフにしては、研究紹介および2009年度以前の研究業績についても掲載しています。

---

## 井上順孝　所長・教授　宗教学・宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［単行本］**

・『人はなぜ新宗教に魅かれるのか？』三笠書房、2009年5月
・（共著）『1Q84スタディーズ BOOK1』若草書房、2009年5月
・（編著）『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂、2009年5月
・（編集責任）『平成國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所プロジェクト・「デジタル・ミュージアムの構築と展開」2009年度研究報告書』國學院大學、2010年1月
・（編集責任）『国際研究フォーラム 映画の中の宗教文化 報告書』國學院大學、2010年2月

**［翻訳］**

・（監訳）ナンシー・K．ストーカー『出口王仁三郎―帝国の時代のカリスマ―』原書房、2009年6月
・（監訳・共訳）クリストファー・パートリッジ『現代世界宗教事典』悠書館、2009年12月

**［論文］**

・“Religious education in contemporary Japan,” Religion Compass 3/4 2009, Blackwell Publishing Ltd., 2009年5月
・「『国体の本義』の時代の「日本文化」」（復刻『日本文化』日本文化協会、クレス出版、解説）2009年8月
・「学生における宗教文化教育への関心について―2008年度アンケート調査の分析から―」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』2）、2009年9月
・「宗教を解体していく映像メディア」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2010』平凡社）、2010年3月
・「映画・ビデオ・DVD」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2010』平凡社）、2010年3月
・「『神々の乱心』と大本教」（『松本清張研究』11、北九州市立松本清張記念館）、2010年3月

**［講演］**

・“Welcome speech and introduction of our religious education project”（第3回国際比較神話学会議、講演及び司会）、2009年5月23日

**［口頭発表］**

・「宗教文化教育と宗教情操教育の相違点」（日本宗教学会第68回学術大会、京都大学）、2009年9月

**［その他］**

・「教育資源としての〈宗教文化〉―宗教文化教育はどんな学問領域に関わるか？―」（「宗教と社会」学会第17回学術大会、テーマセッション、司会、創価大学）、2009年6月7日
・「自著を語る『映画で学ぶ現代宗教』」（『東京新聞』）、2009年6月26日
・「国学院大学・国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」という発想」（『キリスト教新聞』）、2009年11月14日

## 斉藤こずゑ　教授　教育心理学、発達心理学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**【研究紹介】**

専門分野は、発達心理学で、コミュニケーションの生涯発達がテーマです。言語だけでなく、非言語メディアによるコミュニケーションやその基礎的認知メカニズムもかかわります。従来、幼児や就学児の行動観察や、インタビューによる質的データを得て、相互作用分析、会話分析を行ってきました。近年は、研究で用いられる映像資料の意味付けに焦点を当て、発達研究方法及び、教育方法としての映像メディアの機能を研究しています。映像視聴や制作による認識の再構成やコミュニケーションを、フィールドワークやアクションリサーチによって質的に検討しています。また、そのような映像資料やフィールドワークに関わる倫理的問題の検討も並行して行っています。

**【研究業績】**

**［単行本］**

・（分担執筆）『社団法人日本心理学会倫理規定』日本心理学会倫理委員会、金子書房、2009 年 8 月

・（責任編集）『児童心理学の進歩 Vol.49［2010 年版］』日本児童研究所編、金子書房、2010 年 6 月

**［論文］**

・「映像発達研究法の可能性―フィールドにおける洞察を観る―」（『日本発達心理学会発達心理学研究』20(1)、日本発達心理学会）、2009 年 4 月

**［学会発表・シンポジウムなど］**

・「言語発達観形成とメディアの機能―言語と映像―』（日本発達心理学会第 20 回大会発表論文、日本女子大学、ポスター発表）、2009 年 3 月

・「保育実践の研究と倫理―園での研究における留意点―』（日本保育学会学会企画シンポジウム、千葉大学、指定討論）、2009 年 5 月

・「臨床発達心理士の『倫理の基本』」（日本臨床発達心理士会第 5 回全国大会 倫理委員会企画シンポジウム、名古屋、指定討論）、2009 年 8 月

・「ファインダーの裏側―映像データの語る観察者のナラティヴ―』（日本心理学会第 73 回大会ワークショップ『ビジュアル・ナラティヴ研究の可能性』、立命館大学、話題提供口頭発表）、2009 年 8 月

・「映像制作における制作者の映像ナラティヴ―大学生の映像メディア表現における経験と創造の分析―』（日本心理学会第 73 回大会、立命館大学、ポスター発表）、2009 年 8 月

・「ビジュアル・ナラティヴ研究の可能性 (2) －マンガの物語構造を漫画家／小説家／漫画原作者の立場から検討する―』（日本発達心理学会第 21 回大会シンポジウム、神戸国際会議場、企画）、2010 年 3 月

・「映像実践における自己と場の意味付け」（日本発達心理学会第 21 回大会発表論文、神戸国際会議場、ポスター発表）、2010 年 3 月

**［その他］**

・「特集：座談会「ストレス研究における倫理とは―心理学の立場から―」（『ストレス科学研究』24、ストレス科学研究所）、2009 年

・「子ども理解のパラドックス―子どもの観察方法―』（さいたま少年友の会主催の講演会、浦和市、講演）、2009 年 9 月

## 遠藤潤　准教授　日本宗教史

担当プロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

**［論文］**

・「出雲大社と人生儀礼」（『大社町史』中巻、出雲市）、2009年9月

**［口頭発表］**

・「内務省神社局と神社調査―「特殊神事」を焦点として―」（日本宗教学会第68回学術大会、京都大学）、2009年9月13日

・「近世国学の古代研究―平田篤胤を焦点として―」（國學院大學北海道短期大学部公開講座「國學院の古代研究」、國學院大學北海道短期大学部）、2009年10月3日

・「近代の特殊神事と神饌―神社行政・神道史学・民俗学―」（國學院大學伝統文化リサーチセンター公開講座「そなえを問う」第3回、國學院大學）、2009年12月12日

・「平田篤胤と気吹舎―教祖論・開祖論からみた「大人」と門人組織―」（天理大学おやさと研究所宗教研究会「教祖論・開祖論の構築・脱構築」、天理大学）、2010年1月23日

## 黒﨑浩行　准教授　情報化と宗教、現代社会と神社神道

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［論文］**

・（共著）「情報化社会における宗教の社会貢献」（稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』世界思想社）、2009年12月

**［口頭発表］**

・「都市祭礼とコミュニティ意識」（神道宗教学会第63回学術大会、國學院大學）、2009年12月6日

**［その他］**

・「地域コミュニティの変容と神社神道の社会的役割再考」（神道宗教学会第63回学術大会、シンポジウム、司会、國學院大學）、2009年12月5日

・「国際化に向き合う神社神道」（シンポジウム「平成21年度國學院大學「特色ある教育研究」神道文化学部「国際化に対応した神道人育成のための基礎的調査と教材開発」」、司会、國學院大學）、2010年2月21日

## 平藤喜久子　准教授　神話学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［論文］**

・“A New Perspective on Japanese Myth Education”（『國學院大學研究開発推進機構紀要』2）、2010年3月

**［口頭発表・講演］**

・“A New Perspective on Japanese Myth Education”, The 3rd International Conference on Comparative Mythology, Kokugakuin University, 2009年5月

・「宗教文化教育の資源としての神話」（「宗教と社会」学会第17回学術大会、テーマセッション「教育資源としての〈宗教文化〉―宗教文化教育はどんな学問領域に関わるか？―」、創価大学）、2009年6月

・「19世紀神話学とチェンバレン」（日本宗教学会第68回学術大会、京都大学）、2009年9月

・「神話学の「発生」をめぐって―学説史という神話―」（早稲田大学高等研究所シンポジウム「近代学問の起源と編成」、早稲田大学）、2010年3月

・公開講座「日本の神話と伝説」（公開講座『世界の神話、伝説、宗教』、朝日カルチャーセンター）、2009年12月

・公開講座「伊勢神宮にみる神信仰―式年遷宮と日本人―」（NHK 文化センター八王子教室）、2010 年 3 月
・講演「2 時間でざっくり理解する古事記」（丸の内はんにゃ会、奈良まほろば館）、2010 年 3 月

［その他］

・（分担執筆）「終末映画」「宮崎アニメとアニミズム」「おくりびと」「お葬式」「ナルニア国物語」（井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』、弘文堂）、2009 年 5 月
・「神話教育の展望―宗教文化としての神話―」（『神社新報』第 2991 号）、2009 年 9 月 7 日
・（監修・解説）「日本神話」（『voice style +plus 神々の国、日本』、ヴォイス）2009 年 10 月
・（共著）「ホルトム文庫文献目録」（『國學院大學研究開発推進機構紀要』2）、2010 年 3 月

## ノルマン・ヘイヴンズ（HAVENS, Norman）　准教授　日本宗教史、日本の民間信仰

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 松本久史　准教授　近世・近代の国学・神道史

担当プロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

［論文］

・「荷田派の霊魂観と実践―他界の認識を巡って―」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』4）、2010 年 3 月

## 塚田穂高　助教　宗教社会学、近現代日本の宗教運動

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

［研究紀介］

宗教社会学の立場から、日本のいわゆる新宗教運動を中心に研究してきました。宗教情報リサーチセンター（RIRC）に所属してからは、「カルト」問題などの現代宗教のアクチュアルな問題に、集積されたメディア情報等を駆使しながら、継続的に注意を払っていく必要性を認識しました。2009 年は、某団体が政治団体を結成し、国政選挙に大量に打って出ました。こうした眼前の問題に、研究に携わる者がどういう発信をできるか、ということも考えさせられました。今後は、「戦後日本（新）宗教のナショナリズム」というテーマで、諸団体の政治との関わりや、国家・天皇・日本文化への眼差しを明らかにしていきたいと思っています。

［論文］

・「現代日本における宗教性の行方―社会問題化する宗教、靖国神社問題、宗教の「社会貢献」の一年から―（国内の宗教動向）」（財団法人国際宗教研究所編『現代宗教 2009』、秋山書店）、2009 年 6 月
・「新新宗教における文化的ナショナリズムの諸相―真光と幸福の科学における日本・日本人観の論理と変遷―」（『宗教と社会』15、「宗教と社会」学会）、2009 年 6 月
・「変貌する「幸福の科学」の今昔―政治進出までの二三年間とその国家観―」（『世界』795（2009 年 9 月）、岩波書店）、2009 年 8 月

［口頭発表］

・「コメント：宗教社会学・新宗教研究の領域から ―蓄積の必要性・守備範囲の可能性―」（「宗教と社会」学会第 17 回学術大会、書評テーマセッション「カルト／スピリチュアリティ／現代宗教の把握―藤田庄市著『宗教事件の内側』、櫻井義秀編著『カルトとスピリチュアリティ』を題材に―」、創価大学）、2009 年 6 月
・「日本の新宗教におけるナショナリズム―幸福の科学の運動展開と政治進出―」（東 ASIA 宗教文化学会国際学術大会、北海道大学）、2009 年 8 月

・「日本の新宗教における国家観・天皇観と実践―解脱会の事例から―」（日本宗教学会第 68 回学術大会、京都大学）、2009 年 9 月
・「幸福の科学の政治進出―概要と軌跡、主張と結果、そして展望―」（シンポジウム「幸せをめぐる政治・日本の宗教団体とその政治活動」、ドイツ日本研究所）、2009 年 11 月

**［その他］**

・（分担執筆）「ある朝スウプは」「カナリア」「ディスタンス Distance」「Column 新宗教教団作成の映画」「靖国 YASUKUNI」（井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂）、2009 年 5 月
・「『幸福実現党』とは何だったのか―宗教記事データベース所収記事と選挙データからの分析―（研究ノート）」（『ラーク便り』45、宗教情報リサーチセンター）、2010 年 2 月
・「幸福の科学の映像メディア利用―幸福実現党、映画『仏陀再誕』を中心に―」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2010』、平凡社）、2010 年 3 月
・（共著）「宗教がわかる Book ガイド（2009 年刊）」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2010』、平凡社）、2010 年 3 月

**［2008 年度までの主な研究業績］**

・「『２世信者』の信仰形成の過程と教団外他者」（川又俊則・寺田喜朗・武井順介編著『ライフヒストリーの宗教社会学―紡がれる信仰と人生―』、ハーベスト社）、2006 年
・「霊能の「指導者集中型」宗教運動の展開過程における発達課題―日本の新宗教・霊波之光の事例から―」（『東京大学宗教学年報』24、東京大学宗教学研究室）、2007 年
・「新宗教運動における指導者の後継者への継承過程―霊波之光の事例から―」（『次世代人文社会研究』3、東西大学校日本研究センター）、2007 年
・（共著）「教団類型論再考―新宗教運動の類型論と運動論の架橋のための一試論―」（『白山人類学』10、白山人類学会）、2007 年
・「高木宏夫の新興宗教研究・再考」（『東京大学宗教学年報』25、東京大学宗教学研究室）、2008 年
・「宗教事件関係年表」「教団・団体解説」（藤田庄市『宗教事件の内側―精神を呪縛される人びと―』、岩波書店）、2008 年

## 星野靖二　助教　宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［論文］**

・“Reconfiguring Buddhism as a Religion: Nakanishi Ushirō and His *Shin Bukkyō*” in *Japanese Religions* Vol.34 No. 2, 2009 年 7 月
・「キリスト教史と〈宗教〉史の“あいだ”」（市川裕・松村一男・渡部和子編『宗教史とは何か 下巻』、リトン）、2009 年 12 月
・「明治中期における「仏教」と「信仰」―中西牛郎の「新仏教」論を中心に―」（『宗教学論集』29、駒沢宗教学研究会）、2010 年 3 月

**［学会発表・講演会・シンポジウムなど］**

・「明治中期仏教改革論の位相―中西牛郎による「新仏教」の構想を中心に―」（駒沢宗教学研究会第 160 回研究会、駒澤大学）2009 年 6 月 24 日
・「“仏教”を“演説”する」（日本宗教学会第 68 会学術大会、パネル「明治仏教史を上書きする」、京都大学）、2009 年 9 月 13 日
・「田中達と其時代」（「宗教と社会」学会「社会的コンテクストの中のキリスト教」プロジェクト研究会、立教大学）、2009 年 10 月 3 日

**［その他］**

・「書評 加藤信朗監修、鶴岡賀雄・加藤和哉・小林剛編『キリスト教をめぐる近代日本の諸相』」（『宗

教研究』360（83-1））、2009 年 6 月
・「書評特集『賀川豊彦』」（『国際宗教研究所ニュースレター』64）、2009 年 10 月 25 日
・編集・解説・解題（島薗進監修、島薗進・高橋原・星野靖二編集『日本の宗教教育論』、全 7 巻、クレス出版）2009 年 11 月　※各巻末解題の一部と、第 7 巻巻末の解説の一部を担当。

## 市川収　客員研究員　惑星物質科学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## カール・フレーレ（FREIRE, Carl）　客員研究員　近代の日本史（特に社会史・思想史）

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［その他］**

・（翻訳）Yu Uchiyama, Koizumi and Japanese Politics: Reform Strategies and Leadership Style, London, Routledge, 2010 年 3 月（原著：内山融『小泉政権―「パトスの首相」は何を変えたのか―』中公新書、2007 年 4 月）

## 李和珍　PD 研究員　宗教社会学、日韓の新宗教教団の比較研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［論文］**

・「韓国新宗教研究の最近の動向―機関誌『新宗教研究』の内容から―」（『国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所年報』2）、2009 年 9 月
・「新宗教の先祖祭祀の日韓比較―妙智會教団と圓佛教の事例を中心に―」（『国学院大学研究開発推進機構紀要』2）、2010 年 3 月

**［その他］**

・「グローバル化時代の到来と新宗教の展開―妙智會教団の事例―」（『宗教学論集』27、駒澤宗教学研究会、2008 年 2 月）で奨励賞を受賞、2010 年 7 月 1 日

## 市田雅崇　PD 研究員　民俗宗教研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［論文］**

・「郷土の偉人像の構築と郷土史―峨山韶碩と峨山道を事例として―」（由谷裕哉・時枝努編『郷土史と近代日本』、角川書店）、2010 年 3 月

**［口頭発表］**

・「特殊神事と民俗」（第 61 回日本民俗学会年会、国学院大学）、2009 年 10 月 4 日

## 今井信治　研究補助員　宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［研究紹介］**

専門は宗教社会学。現代における宗教の拡散・変容を念頭に置き、大衆文化やメディア空間における宗教のあり方を研究している。聖なるものが俗なる領域に回収される過程、あるいは俗なるものがその担い手によって聖化されようとする過程に関心を有している。

本プロジェクトでは Encyclopedia of Shinto のデジタルコンテンツ編集作業を担当。

**［2008 年度までの主な研究業績］**

・「世界のオタクの聖地―秋葉原を中心とするアニメ、マンガの聖地の誕生について―」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2008』、平凡社）、2008 年 3 月

・「アニメ『聖地巡礼』実践者の行動に見る伝統的巡礼と観光活動の架橋可能性―埼玉県鷲宮神社奉納絵馬分析を中心に―」（北海道大学観光学高等研究センター文化資源マネジメント研究チーム編『メディアコンテンツとツーリズム―鷲宮町の経験から考える文化創造型交流の可能性―』、北海道大学観光学高等研究センター）、2009 年 3 月
・「秋葉原はグラウンド・ゼロになったのか」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2009』、平凡社）、2009 年 3 月

## 小田真裕　研究補助員　日本近世史

担当プロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

**［研究紹介］**

近世後期における地域指導者層の学問受容について、下総における平田国学を中心に研究している。その際、思想史研究・村落史研究双方の方法論を用い、(1) 学問の枠組みを自明のものとせず、知識・情報の内容を細かく分析すること、(2) 北総・東総の地域社会構造に踏み込むことを心がけている。

本プロジェクトでは、高玉安兄宛平田銕胤書簡の翻刻・校訂作業および本居文庫蔵『霊能真柱』の注釈作業に従事している。

**［2008 年度までの主な研究業績］**

・「享和～弘化年間における岡田家の地主経営」（渡辺尚志編『畿内の豪農経営と地域社会』、思文閣出版）、2008 年 2 月
・「松代藩家中と天保七年飢饉」（渡辺尚志・小関悠一郎編『藩地域の政策主体と藩政』、岩田書院）、2008 年 7 月

## 小林威朗　研究補助員　近世後期の国学・神道史

担当プロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

**［口頭発表］**

・「臓器移植と現代神道」（神道青年全国協議会秋期セミナー、神社本庁）、2009 年 10 月 6 日
・「『霊の梁』について」（神道宗教学会第 63 回学術大会、國學院大學）、2009 年 12 月 6 日
・「神職・国学者岡熊臣の霊魂観に関する一考察」（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所研究事業「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究」ミニシンポジウム「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」、國學院大學）、2010 年 1 月 21 日

## マシュー・チョジック（CHOZICK, Matthew）　研究補助員　カルチュラルスタディーズ・比較文化

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［研究紹介］**

主要研究テーマは、日本におけるカルチュラルスタディーズの問題など。

本プロジェクトでは、『神道事典』などの英訳・編集・訂正を担当している。

**［その他］**

・（翻訳）+81 編集部編 Tokyo Visualist, 河出書房新社、2009 年 10 月
・（インタビューと翻訳）“Hiroki Azuma: The Philosopher of Otaku Speaks,” Metropolis, 2009 年 9 月 3 日
・（ドキュメンタリー映画の翻訳）“Ink Music,” 2009 年

**［2008 年度までの主な研究業績］**

・“Queering Mishima’s Suicide as a Crisis of Language” Electronic Journal of Japanese Studies, 15, 2007 年 10 月
・“De-Exoticizing Haruki Murakami’s Reception” Comparative Literature Studies, 45-1, 2008 年
・（Review）“Japan’s Postwar History” Asian Business and Management, 7, 2008 年 6 月

## 江島尚俊　共同研究員　近代日本における宗教と近代化

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**[論文]**

・「「哲学的仏教研究から歴史的仏教研究へ―井上円了と村上専精を例として―」（『大正大学大学院論集』34、大正大学大学院）、2009 年 12 月 15 日

**[口頭発表]**

・「近代日本における大学制度と僧侶育成に関する一考察」（第 68 回日本宗教学会学術大会、京都大学）、2009 年 9 月 13 日

**[その他]**

・「研究ノート 草創期の大正大学」（星野英紀編『大正大学 回顧と展望』、大正大学出版会）、2010 年 3 月 15 日

## ヤニス・ガイタニディス（GAITANIDIS, Ioannis）　共同研究員　医療人類学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**[口頭発表]**

・「現代日本の霊能者とその相談者の関わり」（第 16 回多文化間精神医学会学術総会、川崎市）、2009 年 3 月 28 日

・‘Nationalistic interpretations of Japanese mythology used to reassure clients during a session with a Japanese type of professional psychic in present-day Tokyo,’ 3rd Annual International Conference on Comparative Mythology, 2009 年 5 月 23 日

・「スピリチュアル・セラピーという職業―現代日本人のビジネスセンス―」（大正大学宗教学会 2009 年度大会、大正大学）、2010 年 3 月 25 日

## イグナシオ・キロス（Quiros, Enrique Ignacio Luis）　共同研究員　上代の国学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 小堀馨子　共同研究員　古代ローマ宗教研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**[論文]**

・「古代ローマ社会におけるローマ人の宗教意識序説―古代ローマ宗教の研究史概観－」（宗教史学研究所編『宗教史とは何か 下』、リトン社）、2009 年 12 月

・「古代ローマにおける死者祭祀―パレンタリア（Parentalia）祭考－」（『東京大学宗教学年報』27、東京大学宗教学研究室）、2009 年 3 月

**[学会発表など]**

・「古代ローマにおける religio 概念について」（日本宗教学会第 68 回学術大会、京都大学）、2009 年 9 月

・「古代ローマ宗教の研究史動向」（宗教史学研究所第 50 回例会、東洋英和女学院大学）、2009 年 12 月

・「古代ローマ人の葬送儀礼に見られる身体観とその変遷」（「文明と身体」共同研究会、国際日本文化研究センター）、2010 年 3 月

**[その他]**

・（分担執筆）「ダ・ヴィンチ・コード」「イエス映画の変遷」（井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』、弘文堂）、2009 年 5 月

## エリック・シッケタンツ（SCHICKETANZ, Erik）　共同研究員　宗教史学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 高橋典史　共同研究員　宗教社会学、日系宗教の海外布教研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

［論文］

・「ハワイ日系仏教における故国日本」（『宗教研究』362）、2009 年 12 月

・「現代日系宗教のハワイ布教の課題と模索―日系人宗教者の育成に注目して―」（『移民研究年報』16）、2010 年 3 月

［口頭発表］

・「現代日系仏教のハワイ・北米布教の現状と新たな動き」（日本移民学会第 19 回年次大会開催校企画シンポジウム「移民と宗教―共生の模索―」、同志社大学）、2009 年 7 月

・「戦間期ハワイ日系宗教と 2 つのナショナリズム」（日本宗教学会第 68 回学術大会、京都大学）、2009 年 9 月

［その他］

・（翻訳）ラファエル・ショウジ「神道ナショナリズムのはずれた予言と日系ブラジル人カトリックの興隆」（國學院大學研究開発推進機構デジタル・ミュージアム双方向翻訳プロジェクト）、2009 年　URL: http://21coe.kokugakuin.ac.jp/articlesintranslation/

・（分担執筆）「しあわせ色のルビー」「マルコムＸ」「MON-ZEN」「コラム 伝統宗教作成の映画」（井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』、弘文堂）、2009 年 5 月

・「移民・宗教・ナショナリズム」（2009 年度学術大会テーマセッション記録、『宗教と社会』15、「宗教と社会」学会）、2009 年 6 月

・（共著）「宗教がわかる Book ガイド（2009 年刊）」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2010』、平凡社）、2010 年 3 月

## 武井順介　共同研究員　宗教社会学、社会調査論

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

［口頭発表］

・「教団変革期における体験談の変容―世界救世教を事例として―」（日本宗教学会第 68 回学術大会、京都大学）、2009 年 9 月

・「断片化される教祖像―世界救世教いづのめ教団信者の体験談を手がかりとして―」（天理大学おやさと研究所宗教研究会、天理大学）、2010 年 1 月

［その他］

・「新刊書紹介：望月哲也著『社会理論としての宗教社会学』（北樹出版、2009 年）」（『立正大学社会学論叢』7、立正大学社会学会）、2010 年 3 月

## ロハニ・ビナヤク（LOHANI, Binayak）　共同研究員　仏教美術

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## ジャン＝ミシェル・ビュテル（BUTEL, Jean-Michel）　共同研究員

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 松本喜以子　共同研究員　計算機シミュレーション

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 三ツ松誠　共同研究員　幕末国学研究

担当プロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究 ― 霊祭・霊社・神葬祭 ―」

**［論文］**

・「異国と異界―安政期の三輪田元綱―」（『神道宗教』216）、2009 年 10 月

・「学者と講釈師のあいだ―平田篤胤『霊能真柱』における安心論の射程―」（『死生学研究』13）、2010 年 3 月

・「長野義言の「霊魂考」」（『東京大学日本史学研究室紀要』別冊）、2010 年 3 月

**［口頭発表］**

・「本居派の学校構想再考―内遠期を中心に―」（第 26 回鈴屋学会大会）、2009 年 4 月

・「「みよさし」論の再検討」（史学会第 107 回大会日本史部会近世史シンポジウム「18 世紀の近世日本」）、2009 年 11 月

**［その他］**

・「参加記 2008 年度人間文化研究機構主催・アジア民衆史研究会共催シンポジウム「国民国家形成期の民衆運動と政治文化」」（『アジア民衆史研究会会報』臨時号）、2009 年 9 月

・「書評 吉田真樹著『平田篤胤―霊魂のゆくえ―』」（『思想史研究』10）、2009 年 10 月

・「コメント」（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所ミニ・シンポジウム「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」）、2010 年 1 月

## ナカイ ケイト・W（NAKAI, Kate Wildman）　客員教授　日本思想史

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**［論文］**

・“Tokugawa Approaches to the Rituals of Zhou: The Late Mito School and ‘Feudalism,’” in Benjamin A. Elman and Martin Kern, eds., Statecraft and Classical Learning: The Rituals of Zhou in East Asian History, Brill, 2010 年

**［口頭発表・講演など］**

・“Situating Mitogaku: Aizawa Seishisai and the Naobi no Mitama Debate,” presented at “Cambridge Conference on Tokugawa Thought,” Selwyn College, Cambridge, 2009 年 3 月

・“The Vicissitudes of Kings Tang and Wu in Tokugawa Japan,” presented at the symposium “Commonality and Regionality in the Cultural Heritage of East Asia,” Barnard College, New York, 2009 年 5 月

## 林淳　客員教授　日本宗教史

担当プロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

# 出版物紹介

## 井上順孝著『人はなぜ「新宗教」に魅かれるのか？』

（三笠書房、2009 年 5 月）

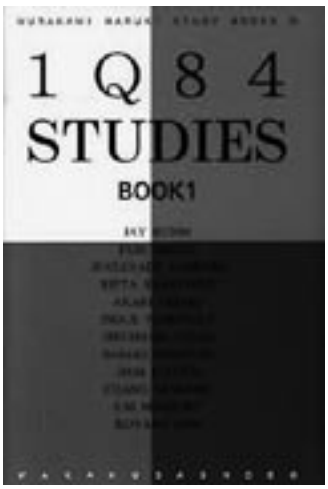
**内容紹介**

新宗教についての入門書。新宗教の歴史と現況についてのさまざまなテーマを、それぞれ 2 頁ないし 4 頁で解説している。新宗教が注目される理由、入信後の変化、教団の経済問題、教祖、社会活動などのテーマ別説明と、系統別・時代別の主要な教団説明という構成になっている。系統別では天理教系、霊友会系、大本系、世界救世教系、法華・日蓮系、密教系、また時代別では 19 世紀、20 世紀前半、戦後といった括りになっている。

## 井上順孝共著『1Q84 スタディーズ BOOK1』

（若草書房、2009 年 11 月）

**内容紹介**




村上春樹著の『1Q84』（1）（2）についてのさまざまな視点からのエッセイが集められている。その中で井上順孝「見かけから自由になれるか？――信仰が紡ぎ出す『二つの世界』」という章で、『1Q84』に登場する「証人会」、「タカシマ塾」、「さきがけ」、「あけぼの」といった、宗教団体あるいは宗教性のうかがえる団体に言及しながら、その宗教的側面がどれほど意識されているかについて言及する。

## 井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』

（弘文堂、2009 年 5 月）

**内容紹介**

映画を宗教文化教育の教材として用いることを念頭に置いて編集された本。映画の中には、儀礼や祭りをはじめ、宗教に関わるさまざまなシーンを含んだものが数多くある。映画は、宗教の教えや儀礼だけでなく、生活の中の宗教、あるいは生きた宗教文化を感じ取る上で、きわめて優れた素材であるという観点から、世界各地のさまざまなジャンルの映画 82 本をとりあげている。「宗教を知っているとどう面白く見えるか」、「この映画から宗教について何が学べるか」に焦点をあてて解説している。20 名が執筆しているが、研究開発推進機構関係者は、井上順孝、黒﨑浩行、小堀馨子、E･シッケタンツ、高橋典史、塚田穂高、永井美紀子、平藤喜久子、N・ヘイヴンズである。

## ナンシー・K. ストーカー著・井上順孝監訳・岩坂彰訳『出口王仁三郎―帝国の時代のカリスマ―』

（原書房、2009 年 6 月）

**内容紹介**

出口王仁三郎をカリスマ的宗教起業家という視点からとらえた Prophet Motive: Deguchi Onisaburo, Oomoto, and the Rise of New Religions in Imperial Japan の翻訳である。ストーカーは、ウェーバーのカリスマ論を踏まえ、新宗教の展開過程に伴う基本的な問題点を認識しながら、王仁三郎の生涯にわたる活動の特性に着目している。岩坂彰が全体を翻訳し、井上が問題点をチェックし、若干の補足をしつつ監訳としたものである。また末尾に監訳者としての解説がある。

## クリストファー・パートリッジ編著・井上順孝監訳及び共訳『現代世界宗教事典―新宗教、セクト、代替スピリチュアリティ―』

（悠書館、2009 年 12 月）

**内容紹介**

世界の現代宗教について幅広い視点から扱った事典である Encyclopedia of New Religions: New Religious Movements, Sects and Alternative Spiritualities の翻訳である。本書は二重の意味での新しさがある。一つは近代、現代の新しい宗教現象に幅広く網をかけ、分析を行なっている点であり、もう一つは伝統宗教をこうした新しい宗教が形成されてくる土壌として捉えなおすという点である。井上順孝、井上まどか、冨澤かな、宮坂清の共訳である。

## 稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』

（世界思想社、2009 年 12 月）

**内容紹介**

ボランティア・NPO への全般的な関心の高まりとともに、宗教の社会貢献というテーマでの議論が近年活発になってきた。本書は、宗教の社会貢献に期待する立場から、8 本の論考と 10 本のコラム（事例報告）、文献解題を収めている。このような問題設定に対する違和感にも応えるものとなっている。xiv ＋ 249 頁。

## 井上順孝編集責任
## 『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」2009年度研究報告書』

（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2010年1月）

**内容紹介**

本研究所の同プロジェクトによって、2007・08年度に行われた研究成果の一部。2008年11月2日に本学で行われた研究フォーラム「〈宗教情報〉とメディアリテラシー」、ならびに2009年2月7日に本学で行われた東アジア新宗教国際研究会議「東アジア新宗教研究と情報リテラシー」の報告が、収められている（なお、両者は宗教情報リサーチセンターとの共催）。また、4,306の有効回答を分析した、井上順孝「学生の宗教意識の変化―2007年度のアンケート調査を基本とした比較―」が収められている。全78頁。

## 井上順孝編集責任
## 『国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」報告書』

（科学研究費補助金・基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」第2グループ、2010年2月）

**内容紹介**

国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の主催によって、2009年9月20日に開催された国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」の報告が収められている（なお、2009年度のトピックの一つとして本号に同フォーラムのまとめがある）。趣旨説明から第1～5セッション、そして総合討議まで当日の生の議論をなるべく再現することを念頭に置いて編集し、また巻末に議論の中で言及された映画の一覧を付した。全98頁。

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報　第 3 号

平成 22 年 9 月 30 日　発行
発 行 者　井上順孝
編集担当　星野靖二
　　塚田穂高
印 刷 者　日経印刷株式会社
発 行 所　國學院大學研究開発推進機構　日本文化研究所
　　東京都渋谷区東 4 丁目 10 番 28 号
　　郵便番号　150-8440
　　電話　03-5466-0162
　　FAX　03-5466-9237